

交野市埋蔵文化財調査報告1992-II

# 新宮山遺跡

——交野市星田所在——

1993. 3

交野市教育委員会

交野市埋蔵文化財調査報告1992-II

# 新宮山遺跡

——交野市星田所在——

1993. 3

交野市教育委員会



卷頭図版1 新宮山遺跡第1次調査区北東部  
暗褐色シルト層出土文字瓦



卷頭図版2 新宮山遺跡出土硯  
(左—第2次調査区土坑7、  
右—第1次調査区北東部明  
黄褐色シルト層出土)



卷頭図版3 新宮山遺跡出土青銅製品  
左上—第1次調査区北東部暗褐色シルト層出土青銅製三鈷飾金具  
左下—第1次調査区北東部暗褐色シルト層出土青銅製火焰飾金具  
右上—第2次調査区土坑7出土青銅製壺  
右下—第1次調査区土坑2出土小型鏡

## はしがき

交野市の星田は弘法大師が、妙見山・光林寺・星の森に七曜星の降りるのを見て、この3ヶ所を星の靈場としたということから地名が起つたとも伝えられています。このような、星に対する村人の信仰があり、また一方で八幡神への信仰もあったようです。それは交野の山々が天暦三年（949）石清水八幡宮へ寄進されたことに始まるのではないかでしょうか。

今回の調査では、ここ星田の新宮山八幡宮がその時期までさかのぼる信仰の場所であることは、残念ながら確認することができませんでした。しかしながら星田において八幡信仰が盛んになった時期が考古学上においても明らかにできたという意味では、貴重な成果を残した発掘調査であったと考えます。

つきましては、新宮山遺跡の調査並びに本報告刊行にあたり、ご協力いただきました関係各位に心から感謝の意を表しますとともに、今後も交野市文化財保護行政に一層のご理解・ご支援賜りますようお願いいたします。

平成5年3月

交野市教育委員会

教育長 永井秀忠

## 例　　言

1. 本書は、交野市教育委員会が星田公園整備に伴う事前調査として、平成3年11月18日から平成4年3月31日まで発掘調査を実施した交野市星田3丁目2945番地他における発掘調査報告書である。
2. 本書の編集は同教育委員会社会教育課の真鍋成史が行った。本書作成にあたっては、同志社大学大学院生・青柳泰介氏の協力を得た。執筆は、第1章を真鍋が、第2章を真鍋・青柳が、第3章を青柳が、第4章を真鍋・青柳が担当した。
3. 発掘調査補助及び整理にあたっては、青柳泰介、柏野勝重、阿部誠、代永崇、嶋澤聰、佐賀久能、永井寛章、斎藤登美子、大伴篤史、赤澤久弥、山下典子、飯取純子、荻窪春二、荻窪トシ子、渡辺寿津子、野村順栄、佐藤嘉和、須賀哲子、森口健太郎、奥田敏明、長尾正三、福留正章、上田由紀子、浅井実章、尾形幸洋、三原尚子、福森重光、堀口晃平、畠敏道、平林格、北村尚博、西端祐二、渡辺三加子、深見輝子、森智恵子、岡林哲夫、松田安雄、好光直子、中戸寿夫の諸氏に参加していただいた。
4. 調査及び報告書作成にあたっては下記の方々より御協力・御指導いただいた。記して感謝の意を表したい。奈良大学教授・水野正好、同大学助教授・西山要一、同大学講師・木下密運、奈良国立文化財研究所・佐川正敏・山崎信二・寺崎保広・渡辺晃宏、堺市埋蔵文化財センター・森村健一。
5. 本書でレベル高はすべて海拔絶対高で、方位は磁北方位である。また土色及び土器の色調は「新版標準土色帳」（農林省農林水産技術会事務局発行）によった。
6. 瓦の実測図番号と写真番号とは対応しない。その対照は第1～4表で示したが、表に記載できなかった分の対照は以下の通りである。

写真 No.3 3 → 実測図 No.5 1

3 4 → 5 4

5 2 → 4 6

5 3 → なし

5 4 → なし

なお、本文中の遺物番号は実測図番号を採用した。写真番号は図版番号と対応しているのではなく、図版9～23中の写真的通し番号を示している。

7. 瓦以外の遺物の実測図番号と図版中の写真番号は対応している。本文中に実測図がない遺物に対しては図版番号を付した。

# 目 次

第1章 はじめに .....	1
第2章 調査の概要 .....	2
1. 第1次調査区 .....	2
(1) 基本層序 .....	2
(2) 遺構・遺物 .....	2
2. 第2次調査区 .....	8
(1) 基本層序 .....	8
(2) 遺構・遺物 .....	8
第3章 中近世瓦について .....	14
1. 概要 .....	14
2. 瓦の観察 .....	14
(1) 軒丸瓦 .....	14
(2) 軒平瓦 .....	14
(3) 丸瓦 .....	16
(4) 平瓦 .....	17
(5) 道具瓦 .....	18
(6) 棟瓦 .....	20
(7) 文字瓦 .....	20
3. 変遷と年代 .....	33
4. 建物との関係 .....	34
5. 文字瓦について .....	36
6. おわりに .....	38
第4章 まとめ .....	43

# 挿図目次

- 第1図 新宮山遺跡調査位置図  
第2図 第1次調査区北東部東西断面図（A-B）  
第3図 第1次調査区遺構配置図（第1遺構面）  
第4図 土坑1平面・断面実測図  
第5図 土坑1出土遺物実測図  
第6図 明黄褐色シルト層出土硯実測図  
第7図 第1次調査区遺構配置図（第2遺構面）  
第8図 土坑3平面・断面実測図  
第9図 土坑3出土遺物実測図  
第10図 土坑4平面・断面実測図  
第11図 土坑4出土遺物実測図  
第12図 明黄褐色シルト層出土錢貨拓影  
第13図 第1次調査区遺構配置図（第3遺構面）  
第14図 土坑2出土遺物実測図  
第15図 第2次調査区遺構配置図  
第16図 溝2平面・断面実測図  
第17図 溝2出土遺物実測図  
第18図 土坑2平面・断面実測図  
第19図 土坑2出土遺物実測図  
第20図 土坑6平面・断面実測図  
第21図 土坑3平面・断面実測図  
第22図 土坑3出土遺物実測図  
第23図 土坑5平面・断面実測図  
第24図 土坑5出土遺物実測図  
第25図 土坑7平面・断面実測図  
第26図 土坑7出土錢貨拓影  
第27図 土坑7出土遺物実測図  
第28図 第1次調査区出土軒丸瓦  
第29図 第1次調査区出土丸瓦(1)  
第30図 第1次調査区出土丸瓦(2)  
第31図 第1次調査区出土丸瓦(3)  
第32図 第1次調査区出土丸瓦(4)  
第33図 第1次調査区出土軒平瓦(1)・軒棟瓦  
第34図 第1次調査区出土軒平瓦(2)  
第35図 第1次調査区出土軒平瓦(3)  
第36図 第1次調査区出土擗棟瓦・平瓦(1)  
第37図 第1次調査区出土平瓦(2)  
第38図 第1次調査区出土烏衾瓦・雁振瓦  
第39図 第1次調査区出土棟込瓦・面戸瓦  
第40図 第1次調査区出土文字瓦拓影  
第41図 石塔残欠鉢文拓影  
第42図 星田名所記

- 第43図 星田村古繪図（天保八年成立）  
第44図 星田村古繪図（18世紀中葉以降成立）  
第45図 滋賀県大津市田上黒津町光明寺所有梵鐘  
第46図 新宮山遺跡所在石造物

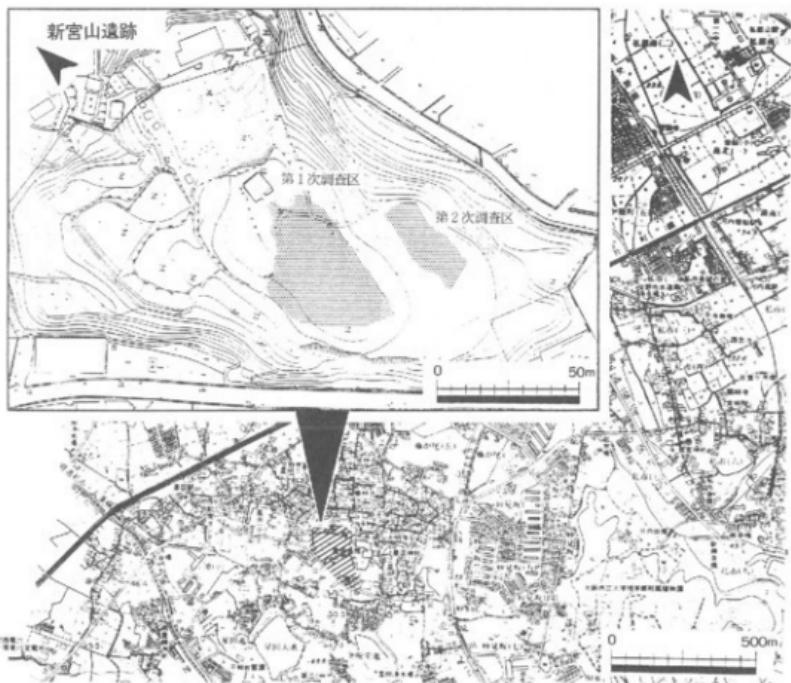
# 表目次

- 第1表 軒丸瓦系遺物一覧表  
第2表 丸瓦系遺物一覧表  
第3表 軒平瓦系遺物一覧表  
第4表 平瓦系遺物一覧表

# 図版目次

- 卷頭図版 1 新宮山遺跡第1次調査区北東部暗褐色シルト層出土文字瓦  
卷頭図版 2 新宮山遺跡出土硯  
卷頭図版 3 新宮山遺跡出土青銅製品  
図版 1 遺跡周辺航空写真（昭和23年3月19日撮影）  
図版 2 第1次調査区  
図版 3 第1次調査区  
図版 4 第2次調査区  
図版 5 第2次調査区  
図版 6 第1次調査区出土遺物  
図版 7 第2次調査区出土遺物  
図版 8 第2次調査区出土遺物  
図版 9 第1次調査区出土軒丸瓦(1)  
図版 10 第1次調査区出土軒丸瓦(2)・丸瓦(1)  
図版 11 第1次調査区出土丸瓦(2)  
図版 12 第1次調査区出土丸瓦(3)  
図版 13 第1次調査区出土軒平瓦(1)・軒棟瓦  
図版 14 第1次調査区出土軒平瓦(2)  
図版 15 第1次調査区出土軒平瓦(3)・文字瓦  
図版 16 第1次調査区出土擗棟瓦・平瓦(1)  
図版 17 第1次調査区出土平瓦(2)・烏衾瓦(1)  
図版 18 第1次調査区出土烏衾瓦(2)・雁振瓦  
図版 19 第1次調査区出土面戸瓦  
図版 20 第1次調査区出土棟込瓦・鬼瓦  
図版 21 第1次調査区出土丸瓦細部  
図版 22 第1次調査区出土丸瓦細部  
図版 23 第1次調査区出土丸瓦・雁振瓦・平瓦細部

# 第1章 はじめに



第1図 新宮山遺跡調査位置図

昭和60年1月14日に事業認可を得て、交野市が建設を予定している都市計画公園3・3・5星田公園は、周知の埋蔵文化財包蔵地新宮山遺跡に含まれるため事前に試掘調査が必要となり、市より届出を受けた教育委員会では、平成3年8月20日付交教委社発第149号にて文化財保護法第57条の3第1項に基づく土木工事の通知を文化庁に進達した後、平成3年8月29日付交教委社発第154号にて同法98条の2第1項に基づく発掘調査の通知を文化庁に行った。

以上の手続きを踏んだ上で、教育委員会が平成3年9月にトレンチ調査を実施したところ、調査地全域にて中世後期から近世にかけての遺構・遺物を確認したので、公園整備によって遺跡が破壊される地区に限って埋蔵文化財発掘調査を同年11月より実施した。

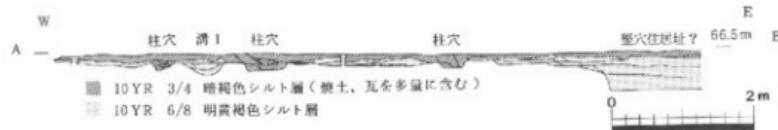
調査は、第1、2次調査とも機械掘削により表土を取り除いた後、人力により遺構検出及び遺構実測を行った。

## 第2章 調査の概要

### 1. 第1次調査区

#### (1) 基本層序

暗褐色シルト層（調査区北東部においては焼土や瓦を多量に含む）、明黄褐色シルト層（瓦を少量含む）、地山（花崗岩層）よりなる。シルト層は整地による堆積と考えられる。



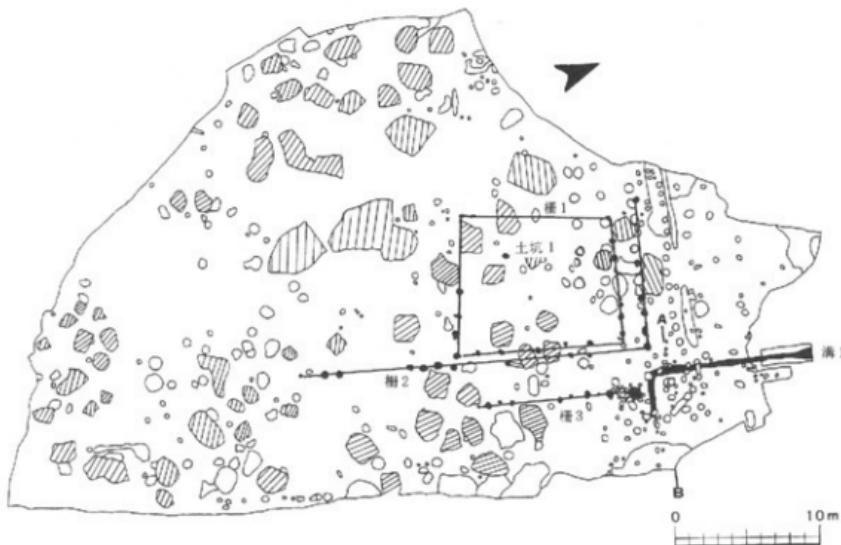
第2図 第1次調査区北東部東西断面図（A-B）

#### (2) 遺構・遺物

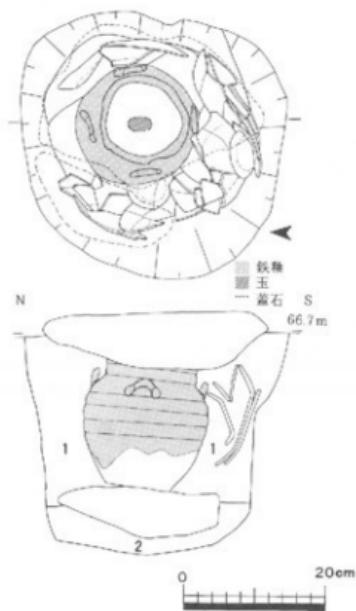
遺構面は3面確認されたので、各面ごとに遺構の概要を述べていく。

##### 第1遺構面（I期）

地山に形成された遺構よりなり、土坑、柵、溝などが検出された。



第3図 第1次調査区遺構配置図（第1遺構面）

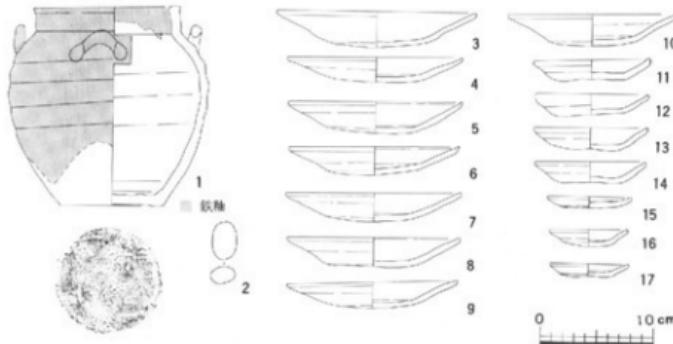


1. 2.5Y 6/6 明黄褐色シルト層  
2. 7.5YR 5/5 明褐色粘土質シルト層

第4図 土坑1平面・断面実測図

**土坑1** 調査区の中央部北側に位置し、直径約40cm・深さ約30cmを測る円形状を呈する。埋納手順は、穴を掘削して床づくりをしてから台石を据え、その上に鉄軸陶器（No.1）を置く。その陶器の中には丁寧に磨かれた白色の玉（No.2）を納める。その陶器の周囲を完形もしくは破碎された土師質皿を入れ、その上に蓋石を置いて埋納を完了する。土師質皿は白焼き系のものに統一され、松藤和人氏の分類<sup>⑩</sup>に従えば、大皿（No.3～10）・中皿（No.11～14）・小皿（No.15～17）に3分類できる。四耳壺には鉄軸を付着させており、13世紀後半の瀬戸窯で焼成されたものであろう。四耳壺中からは直径2.5cm、幅1.5cm、厚さ1.0cmの白色の玉が出土している。この土坑の周辺には柵1が巡っており、この内側に社殿を築いていたと考えるなら、この土坑は地鎮祭祀に関連する可能性がある。

(1) 松藤和人「同志社キャンパス内出土の土器・陶磁器の編年一中・近世を中心としてー」『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物 同志社大学校内埋蔵文化財調査報告資料編II』同志社大学校地学術調査会 1978年



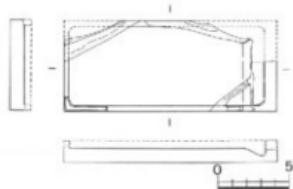
第5図 土坑1出土遺物実測図

柵1～3 調査区中央部北側に位置する。柱穴の掘形は円形で、直径は平均して45cmであり、柱間は平均して100cmである。いづれも中心建物（社殿）を遮蔽する施設であったと思われる。三基とも埋土は同じであり、互いに重複関係もないことから、同時存在の可能性もあるが、いづれも遺存状況は良くないので、断言はできない。

溝1 調査区北東部に位置する。東西方向、南北方向の主軸はともに柵1～3の各々の主軸と合致するようなL字形の遺構である。幅56cm、深さ16cmで、断面はU字状を呈し、埋

土は2層に分かれる。溝の底面は北へ向かって低くなっている、調査区の北端部では幅も北へ行くにつれて拡がっている。

そのほか明黄褐色シルト層中から石製の硯が出土している。硯は長さ14.9cm、幅6.4cm、高さ1.5cmを測る。色調は5G Y6/1オリーブ灰色を呈する。

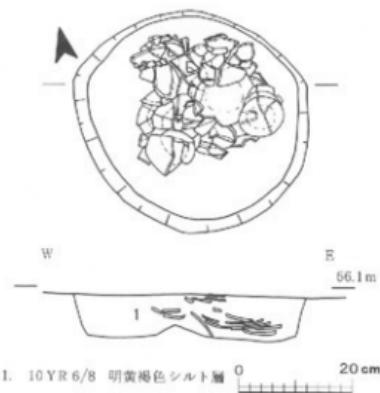


第6図 明黄褐色シルト層出土硯実測図

第2遺構面（II期）



第7図 第1次調査区遺構配置図（第2遺構面）



第8図 土坑3平面・断面実測図

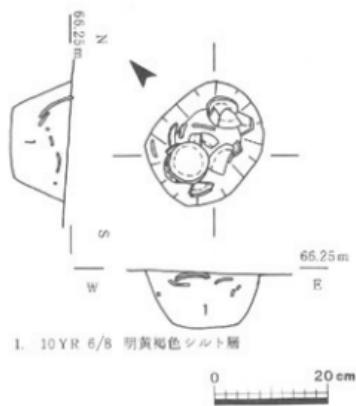
明黄褐色シルト層上に形成された遺構よりなり、土坑、柵、溝などが検出された。

土坑3 調査区の中央部西側に位置し、直径約40cm、深さ約10cmを測る円形状を呈する。白焼き系の土師質皿を多數検出している。中皿（No.1、2）・小皿（No.3～5）の2分類ができる。

土坑4 調査区の北東隅に位置し、直径22cm、短径18cm、深さ10cmを測る梢円形を呈する。白焼き系の土師質皿、そのうちでも小皿（No.1～19）のみの出土が認められた。土師質皿に混じって、磨かれてはいないが土坑1出土の白色の石と同じ色調・材質の自然石が数点出土したことは注目してよい。

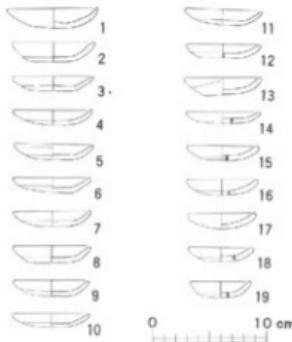


第9図 土坑3出土遺物実測図



第10図 土坑4平面・断面実測図

土坑3、4とも土坑1とは異なり、祭祀遺物の投棄場と考えられるのではないかろうか。



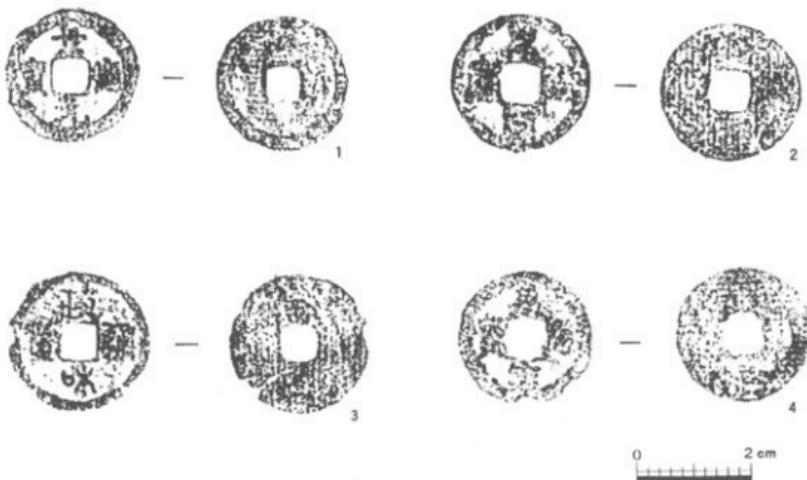
第11図 土坑4出土遺物実測図

柵4 調査区のほぼ全域で確認された。ただし、西側では認識できなかったことや北側では蛇行しており、旧状復元の難しい遺構である。柱穴の掘形は円形で、直径は平均して40cmであり、柱間は北側で約100cm、東一南側では約200cmである。おそらく柵1～3と同様に、中心建物群を遮蔽する施設であったと思われる。更に、北側で蛇行しており、なんらかの意味があったのであろうか。

溝2 調査区北側（柵4の外側）で検出した東西方向の溝である。幅は平均して40cm、深さは現状ではおよそ5cmしかないので、この溝は途切れた状態で検出されたが、本来は一連のものとしてよいと思われる。また、雨落溝とも、独立した区画溝とも判断づけがたい。さらに、柵4よりも遺存状況が悪いので、それに先行する可能性がある。

遺構からではないが、II期の遺構群の地盤とする調査区北側の明黄褐色シルト層からは、瓦のはか、銭貨が4枚出土している。宋銭の性格より判断してII期の造営工事に伴い整地土内に投入された可能性が考えられる。宋銭は初鑄年代が1004年の景德元宝（No.1）・1054年の至和通宝（No.2）・1111年の政和通宝（No.3）の銭貨が判読可能であった。そのほか判読不明銭（No.4）も出土している。

調査区北側の暗褐色シルト層中からは、火焰及び三鈷飾金具の青銅製品が出土している（巻頭図版3）。同層中から多量に出土した瓦類と同時期のものと考えられる。



第12図 明黄褐色シルト層出土銭貨拓影

### 第3遺構面（Ⅲ期）

暗褐色シルト層上に形成された遺構よりなり、建物、土坑などが検出された。ほとんど現地表面に露れていた遺構群である。



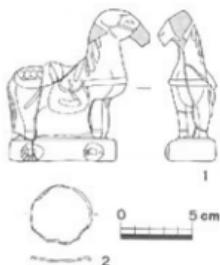
第13図 第1次調査区遺構配置図（第3遺構面）

建物1 調査区中央部の北寄りで検出した。東西3間×南北2間の総柱建物である。柱穴の掘形は円形で、直径は平均して80cm、柱間は平均して200cmである。

建物2 尾根中央部の東北寄りで検出した。礎石は3個しか現存しなかったが、抜取穴と思しきものも含めて復元すると、3間×3間の総柱建物となる。礎石はほぼ円形で、直径は平均して60cm、柱間は平均して100cmである。礎石の配置は現状ではややいびつだが、建物が建てられないほど乱れてはいない。

土坑2 調査区中央部の東寄りで検出した。形態は不整円形で、長軸長約260cm、短軸長約200cm、深さ約30cmである。中から多量の近世瓦や馬形土製品（No.1）、青銅製の小型鏡（No.2）などが出土した。

本遺構からは棟瓦が出土しており、廃棄の時期は19世紀以降の年代が求められるのではなかろうか。



第14図 土坑2出土遺物実測図

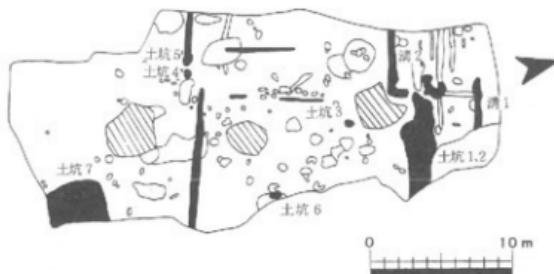
## 2. 第2次調査区

### (1) 基本層序

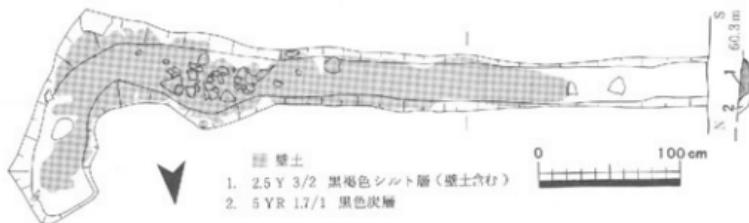
第1次調査区と同じく暗褐色シルト層、明黄褐色シルト層、地山よりなる。明黄褐色シルト層に遺物の包含が認められ、第1次調査区の第2遺構面とはほぼ同時期と捉えることができよう。

### (2) 遺構・遺物

地山に形成された遺構よりなり、溝、土坑などが検出された。第1次調査区と比べ生活財を中心に出土しており、明らかな差異を指摘できる。



第15図 第2次調査区遺構配置図



第16図 溝2平面・断面実測図

溝2 調査区の北側に位置し、最大幅約65cm、深さ約10cmを測る。本遺構からは白焼き系の土師質皿を検出した。中皿（No.1）・小皿（No.2、3）に分類できる。そのほか、土師質皿と形態が同じ瓦質皿（No.4）・羽釜、陶器片、壁土も出土した。



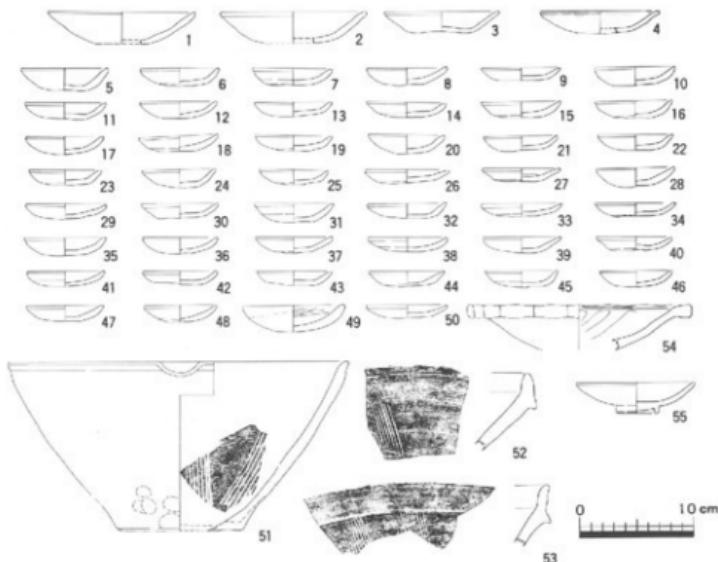
第17図 溝2出土遺物実測図



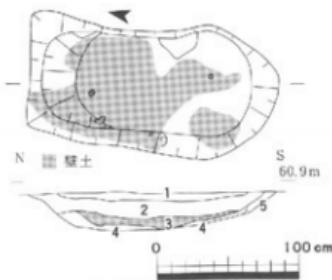
第18図 土坑2平面・断面実測図

としては中国景德鎮窯系白磁碗 (No.55) のほか、龍泉窯系青磁碗 (No.54) も出土している。遺構の性格は断定できないが生活財を捨てていることを考慮に入れると、廃棄施設と考えても良いのではなかろうか。

土坑2 調査区の北側に位置し、最大長約700cm、最大幅約230cm、深さ約30cmを測る。後に土坑1及び土坑10にその一部が切られている。本遺構からは多数の遺物が出土した。土師質皿は白焼き系と赤焼き系の二つに分類できる。大皿 (No.1、2)・中皿 (No.3、4) は白焼き系のみである。No.4は胎土・色調とも他と異なり搬入品の可能性がある。小皿は赤焼き系 (No.5~32) と白焼き系 (No.33~48) ともにみられる。図示しえなかったが、赤焼き系の小皿中に「ヘソ皿」と考えられる底部片を確認できた。胎土・色調ともほかの土師質皿と異なり、搬入品の可能性がある。また土師質皿と形態が同じ瓦質皿 (No.49、50) も出土している。第1次調査区出土の土師質皿では赤焼き系を数点しか認めることはできなかったことと対照的に、同遺構では小皿に限ってのみであるが、その半数を赤焼き系と、2点の瓦質の小皿が占めている。擂鉢には瓦質 (No.51) 及び陶質 (No.52、53) の2種類ある。瓦質のものは信楽焼の模倣と考えられる。陶質のものは備前焼系である。磁器



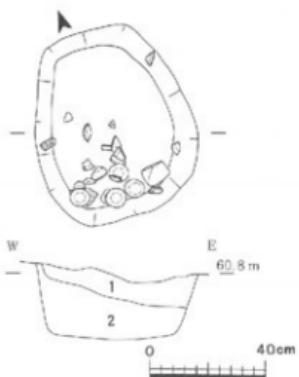
第19図 土坑2出土遺物実測図



1. 2.5Y 4/1 黄灰色シルト層
2. 10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト層
3. 10YR 4/2 灰質褐色シルト層(礫土含む)
4. 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト層
5. 地山

第20図 土坑6平面・断面実測図  
→土坑1→溝2に限られ、これら遺構に沿った形で塀が存在したのであろう。屋敷もこれらの内側に存在したのではなかろうか。

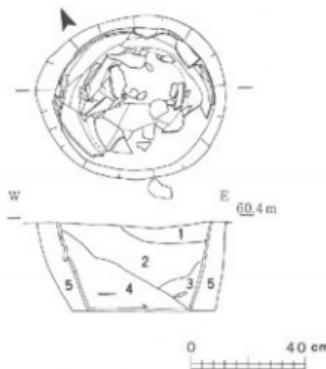
土坑6 調査区東端に位置し、長径約175cm、短径約85cm、深さ約25cmを測る。瓦質羽釜、備前窯搗鉢、壁土を検出した。そのほか多数の木炭片を検出している。新宮山遺跡第2次調査区の特徴として多数の壁土の出土がある。同様の遺物は、土坑1・2・7、溝2でも確認できた。壁土を観察すると片面にのみ棒状のさし込み痕跡(図版8-No.9)を認めることができる。また焼成を受けているものが多くみられ、壁土とすると、第1次調査区におけるII期の火災と対応してくる。また、建物の壁土とするには同調査区では瓦類の出土が極端に第1次調査区に比べ少ない。出土位置をたどれば土坑7→土坑6



第21図 土坑3平面・断面実測図



第22図 土坑3出土遺物実測図

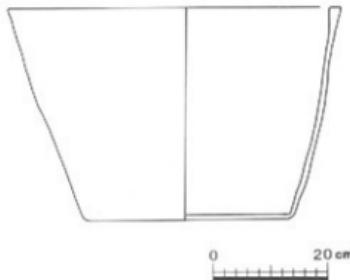


第23図 土坑5平面・断面実測図

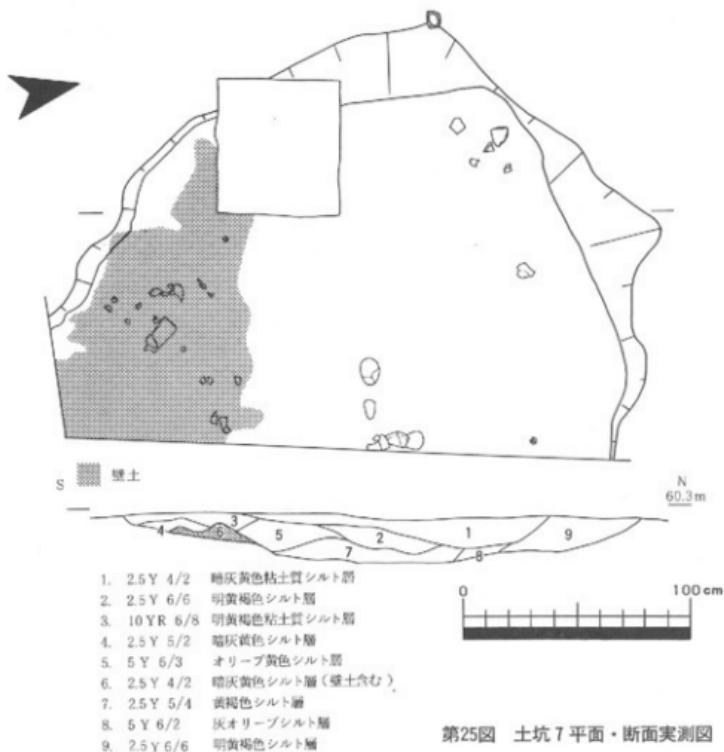
**土坑3** 調査区の中央部北側に位置し、長径約65cm、短径約56cm、深さ約25cmを測る楕円形を呈する。本遺構からは白焼き系の土師質皿を検出した。小皿（No.1、2）のみである。

**土坑5** 調査区の南西部に位置し、長径約65cm、短径約60cm、深さ約25cmを測るやや楕円形を呈する。掘削後瓦質壺を置いたようである。壺は底部に直径約1.5cmの穿孔が認められる。一般に、この種の壺は貯蔵用として認識されているが、穴が開いており別の用途の可能性も考えられよう。またこれと同様の遺構（土坑4）がすぐ東側から検出された。

**土坑7** 調査区の南側に位置するが、一部調査区外に延びているため範囲を確定できない。本遺構からも多数の遺物が出土した。土師質皿は白焼き系と赤焼き系の二つに分類できる。大皿（No.1）は白焼き系のみである。中皿の出土ではなく、小皿は赤焼き系（No.2、7、8、9）と白焼き系（No.3、4、5、6）に分類が可能である。土師質皿と形態が同じ瓦質皿



第24図 土坑5出土遺物実測図



第25図 土坑7平面・断面実測図

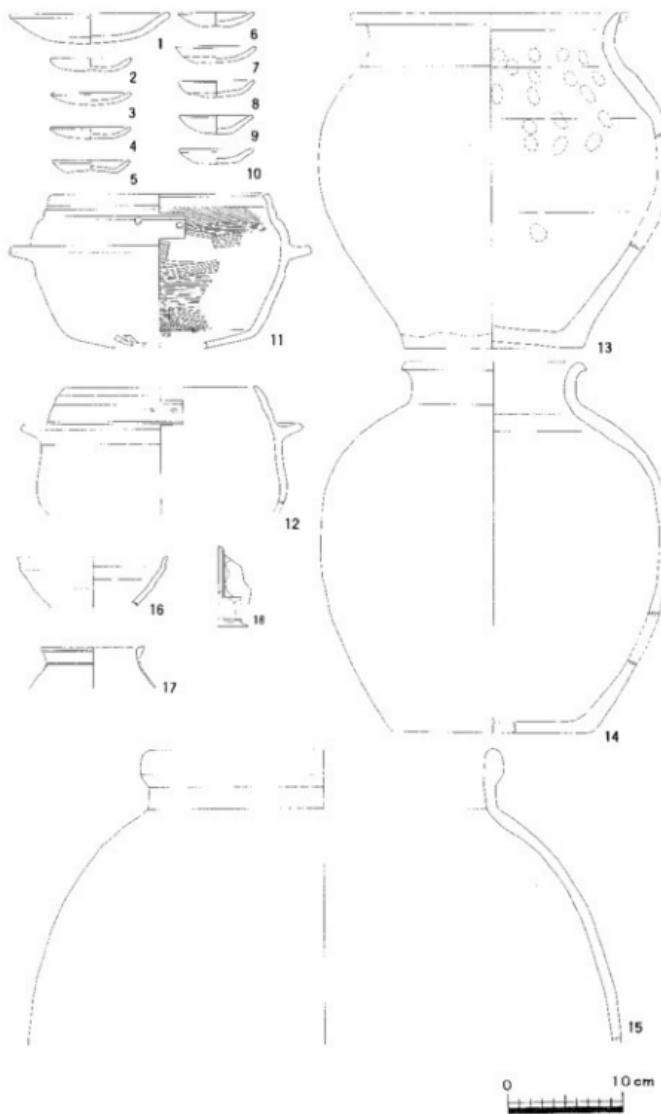
(No10) のほか、瓦質羽釜 (No11、12)・火舎も出土している。

陶器としては常滑窯甕 (No13)、備前窯壺 (No14、15)・鉢鉢、中国建窯系天目碗 (No16) が出土した。そのほか青銅製の壺 (No17)、色調が2.5YR5/3にぶい赤褐色を呈する石製の硯片 (No18)、北宋錢で初鑄年代が1064年の治平元宝 (No19) が出土している。



第26図 土坑7出土銭貨拓影

土坑として報告したが本遺構の西側は新宮山の東側斜面に当ると考えられ、斜面に遺物を廃棄した一例として認識できるのではなかろうか。



第27図 土坑7出土遺物実測図

## 第3章 中近世瓦について

### 1. 概要

今回の調査でコンテナ約60箱分の瓦が出土したが、その大半は第1次調査区の北東隅部で採集されたものである。I・II・III期の瓦の比はおよそ1:5:55である。

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦及び棟瓦がみられる。

以下、器種別に見ていく。

### 2. 瓦の観察

#### (1)軒丸瓦<sup>①</sup>

I類（写真No.1）…明黄褐色シルト層内より1個体出土した（No.1）。全形は確認できなかったが、内区の文様は右巻きの三巴文で、その外側に圓線がめぐっている。外区の文様は珠文で、径は0.7cmと小振であり、間隔は0.6cmと密である。丸瓦部と瓦当部の接合技法は、丸瓦部広端面に幅0.4cmの斜格子状のキザミを施してから瓦当部裏面に接続したものと思われる。瓦当部裏面の丸瓦剝離部に斜格子状の隆起帯が観察されることにより、瓦当部が乾かない段階で丸瓦部を接合したことが想定される。瓦当面にはハナレ砂がみられ、裏面にはナデ調整が施されている。胎土には径1～3mmの砂粒を含む。焼成は今回の調査で出土した瓦の中で最も堅緻である。色調は青灰色を呈する。

II類（写真No.2～6）…大半が暗褐色シルト層内より出土した（No.2～6）。数量的に最も多い一群である。管見する限り全て同範瓦である。また、範傷より鳥糞瓦I類No.42とも同範であることが分かった。文様のシャープなものより丸味を帯びたものへの移行が範型の利用状況を反映しているならば、鳥糞瓦I類No.42（瓦当文様A）→No.2、No.6（瓦当文様B）→No.3、No.4、No.5（瓦当文様C）という先後関係を想定しうる。内区の文様は左巻きの三巴文で、その外側に圓線がめぐっている。外区の文様は珠文で、径は0.9cm、間隔は0.7cmである。丸瓦部との接合技法は、丸瓦部広端面にナナメのキザミを施してから瓦当部裏面に接続する。I類とは違って瓦当部裏面の丸瓦剝離部には隆起帯は認められず平坦である。瓦当面にはハナレ砂がみられ、外縁及び裏面には丁寧なナデ調整が施されている。胎土には径1～4mmの砂粒や小レキを含む。焼成は良好。色調は暗青灰色もしくは黄橙色を呈する。

III類（写真No.7、8）…土坑2で数点検出した（No.7、8）。内区の文様は左巻きの三巴文で、その外側には圓線はみられない。外区の文様は珠文で、径は1.2cmと大きいが、間隔は0.4cmと密である。丸瓦部との接合技法は、No.7をみると瓦当部裏面にナナメのキザミを施している。瓦当面にはハナレ砂と銀化現象がみられ、裏面には丁寧なナデ調整が施されている。胎土はI・II類に比して精良である。焼成は良好。色調は青黒色を呈する。

#### (2)軒平瓦<sup>②</sup>

I～III類に分類しうるが、近世の軒平瓦は検出しえなかった。

I類（写真No16～18）…明黄褐色シルト層内から破片が2点（No16、17）、暗褐色シルト層内から瓦当部の完形品が1点（No18）出土した。文様は連珠文であり、その外側を圓線がめぐっている。珠文径0.7cm、間隔0.2cmのもの（No16、18）と珠文径0.9cm、間隔0.3cmのもの（No17）がある。頸の形態は曲線頸である。瓦当部の製作技法は明確には指摘できない。しかしながら、No17の縦断面を観察すると、瓦当部裏面の傾斜する部位は、平瓦部に貼り付けたものであることが分かるが、それが瓦当面まで及ぶかどうかは判然としない。平瓦部凸面、側面と頸部にはケズリ調整が施され、凹面には布目がみられる。また、瓦当面にはハナレ砂が観察される。胎土には径1～3mmの砂粒を含む。焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

II類（写真No22）…表採の1点のみ（No22）。磨滅が著しい。文様は中心飾りに菱花文を据えた均整唐草文の変形文様であろうと思われ、その外側には圓線がめぐる。頸の形態は段頸であろうか。瓦当部製作技法は不明である。調整技法も磨滅が著しいため分からぬ。胎土はもろく、焼成も軟質である。色調は暗緑灰色を呈する。

III類（写真No24～32）…大半が暗褐色シルト層内より出土した（No24～32）。数量的に最も多い一群であり、全て同範瓦と思われる。軒丸瓦II類のような範型利用の細かな実態は分からぬが、範型の彫直しによると思われる文様の粗雑化がみられるので、No25、No27、No28（瓦当文様A）→No24、No29、No30（瓦当文様B）という先後関係を想定しうる。文様は中心飾りに宝珠文を用いた均整唐草文であり、その外側に圓線はみられない。頸の形態は段頸である。瓦当部の製作技法は、平瓦部凸面狭端部に断面逆台形の粘土を貼り付けるのだが、はじめ平瓦部にキザミを施しておく。そのキザミにはタテ（No28、31）、ナナメ（No32）、ヨコ（No27）の3種が確認された。そのほかにも、軒丸瓦が滑落するのを防ぐ機能を有すると思われる鱗状の突起を平瓦部凹面側縁部に装着する例（No24～26、31、32）や軒平瓦自身が滑落するのを防ぐ機能を有すると思われる断面逆台形の突帯を平瓦部凸面中央部に装着する例（No25、31、32）などがあるが、いずれも予め平瓦部にキザミを施している。前者には棒状工具による斜め上方からの刺突（No24、26、31）とナナメのキザミ（No25、32）の二種が、後者にはヨコのキザミ（No25、32）のみが確認された。傾向としては、瓦当部接続前にナナメキザミを施す例と鱗状突起接続前にナナメキザミを施す例とが組み合わさり、瓦当部接続前にタテキザミを施す例と鱗状突起接続前に刺突を施す例とが組み合わさるようである。更に、前者には彫直し前の瓦当文様（No25）が、後者には彫直し後の（No24）が組み合わさりそうである。平瓦部に関しては平瓦II類の項で詳述するが、No32の軒平瓦の平瓦部凹面において布目のナデ消し痕を観察したことは注目してよい（写真No66）。瓦当面にはハナレ砂がみられ、外縁及び裏面にはナデ調整を施している。胎土には径1～4mmの砂粒や小レキを含む。焼成は良好。色調は暗青灰色が主流だ

が、浅黄橙色を呈するものもある。

III'類（写真No23）…明黄褐色シルト層内より1点のみ検出した（No23）。全形は分からぬ小片だが、文様構成はIII類に類似すると思われる。III類の文様よりも肉厚であるので、それに先行する可能性がある。頸の形態は段頸であろう。平瓦部から剝離した状況を呈する頸部片であるので、III類と同様の瓦当部製作技法を想定しうる。瓦当面にはハナレ砂がみられ、裏面にはナデ調整を施している。胎土には径1～3mmの砂粒を含む。焼成は良好。色調は浅黄橙色を呈する。

### （3）丸瓦<sup>39</sup>

I類（写真No10）…表採の1点のみ（No11）。全長31.8cmの玉縁式丸瓦である。胴部凸面には繩叩き痕をナデた様子がみられ、玉縁部凸面にはナデ調整がみられる（写真No55）。また、胴部凹面では糸切り痕と布目が観察され（写真No56）、玉縁部凹面は布袋の絞られた部分に当たるので凹凸が著しい。胴部凹面広端縁の面取幅は3.9cmであり、側面の面取は胴部から玉縁部に及ぶ（以下「面取A」という）。胴部横断面をみると側面は水平で、凹面側縁は内傾し、両者の境界がシャープであることが分かった。叩き締めがあまいために所々で気泡の痕跡を観察した。胎土は密であるが、焼成はやや軟質。色調は青灰色を呈する。

II類（写真No11）…暗褐色シルト層内より1点のみ出土した（No.9）。全長28.9cmの玉縁式丸瓦だが、全体的に歪んでいる。凸面にはナデ調整を施し、凹面には糸切り痕、布目、弱く波打つ吊紐痕<sup>40</sup>（以下「吊紐痕A」という）がみられる。なお、吊紐痕の内部にも布目が観察されることにより、吊紐は布袋内に存したことが想定される（写真No57）。側面にはI類と同様に「面取A」が施されている。胴部横断面を観察すると側面は内傾しており、凹面側縁は内傾が著しい。胴部広端部では瓦当部が剝離した状況がみられ、凸面広端縁（瓦当部外縁上端）と凹面広端縁（瓦当部裏面）には補充粘土が残存し、後者にはそれを固定するための指頭圧痕がみられる（写真No58）。なお、広端面には瓦当部を接続する際のキザミなどを施さない。玉縁部には径1.4cmの釘穴がある。胎土には径1～7mmの砂粒や小レキを含む。焼成は良好。色調はオリーブ灰色を呈する。

III類（写真No12～14）…大半が暗褐色シルト層内より出土しており、全形の判明した個体数が最も多く、かつ丸瓦の破片の大半はこの一群に属する（No10、12、13）。全長約30cmの玉縁式丸瓦である。凸面にはナデ調整を施し、凹面には糸切り痕、布目、ループ（No10、写真No61）もしくは結び目（No12、13、写真No59、62）を有して強く波打つ吊紐痕（以下「吊紐痕B」という）などがみられる。II類同様布目は吊紐痕内部におよぶようである。胴部凹面広端縁の面取幅は約5cmであり、側面の面取は胴部のみにみられ玉縁部には及ばない（以下「面取B」という）。胴部横断面を観察すると側面はやや内傾しており、凹面側縁は内傾している。側面はナデ調整により端部が丸味を帯びている。No13の凹面広端縁

をみると、ケズリ調整による面取を免れた布目を観察したので、布目は広端縁まで及んでいたことが想定される（写真No60）。また、No10では胴部広端部に瓦当部が剝離した状況がみられ、瓦当部接続前に広端面にはナナメキザミ、凸面広端縁にはタテキザミを施しており、凹面・凸面双方の広端縁には補充粘土を観察した。更に、No10では胴部凹面狭端部に平瓦II類の鱗状突起に引っかけるための半円形の仕切り板を接続している。なお、図示しなかったが、凹面に梢円形の内叩き痕を有する破片もある。胎土には径1～7mmの砂粒や小レキを含む。焼成は良好。色調は灰白色もしくは浅黄橙色を呈する。

IV類（写真No15）…表採の1点のみ（No14）。全長31.4cmの玉縁式丸瓦である。胴部凸面にはヘラナデ調整を施し、凹面には糸切り痕、布目がみられる（写真No63）。胴部凹面広端縁の面取幅は5.5cmであり、側面には「面取B」が施されている。また、胴部横断面を観察すると側面、凹面側縁ともに内傾しており、両者の境界は明瞭である。胴部厚は本調査区で出土した丸瓦の中で最も厚い。胎土には径1～5mmの砂粒を含む。焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

V類（写真No9）…土坑2より数点出土したが、いずれも全形の分かるような破片ではなかった（No15）。玉縁式丸瓦である。凸面は銀化現象が顕著であり、凹面には幅0.6～0.8cmの細長い内叩き痕がみられる。側面には「面取B」がみられる。また、胴部横断面を観察すると側面はやや外傾しており、凹面側縁は内傾するが幅は0.7cmと極端に狭い。胎土は密で、焼成は良好。色調は青黒色を呈する。<sup>④</sup>

#### （4）平瓦<sup>⑤</sup>

I～III類に分類できる。近世瓦（III類）の破片の中には棟瓦を含んでいる可能性がある。I類（写真No36）…表採品と暗褐色シルト層内出土品とが数点あるが、いずれも全形を知り得ない破片ばかりである（No34）。凸面には繩叩きの痕跡とハナレ砂がみられ、凹面には側縁に粘土パリ、それより内側の側縁部に糸切り痕、そして中央部に繩叩きをナデ消した痕跡が観察できた（写真No65）。端面は丁寧に面取されている。凹面狭端縁に幅0.8cmのナナメの面取があるが、他の端縁はシャープである。胎土には径1～5mmの砂粒や小レキを含む。焼成は良好。色調は灰白色を呈する。熨斗瓦の可能性は考えられまいか。

II類（写真No39～41、巻頭図版1）…大半が暗褐色シルト層内より出土し、かつ平瓦の破片の大半はこの一群に属する（No37～41）。「明應」年間銘瓦もこれに含まれる。全長27.5～29.0cmである。凹面では側縁は丸味をおび、広端縁はシャープである。また、狭端縁には幅1cmぐらいのナナメの面取が施されている。丸瓦や平瓦が重なる部分では水垢の痕跡がみられる。全面ナデ調整が施されているが、軒平瓦III類No32平瓦部凹面において観察されたような布目が存在した可能性がある。凸面の端縁はいずれもシャープである。側縁部では側縁より0.5cmほど内側に凸線状隆起がみられる（No39）。ハナレ砂も凸面では顕著にみられる。端面にはナデ調整が施されている。胎土には径1～5mmの砂粒や小レキを

含む。焼成は良好。色調は暗青灰色を呈する。

III類（写真No37、38）…土坑2より数点出土したが、いずれも破片である（No35、36）。5本の沈線を1単位とした文様を施したものが多い（No35では凸面に横線文、No36では凹面に波状文）。顯著な銀化現象は凸面以外の全面にみられ（No36では凸面の側縁部でもみられる）、凸面にはハナレ砂がみられる。また、個別にみていくと、No35では凹面に水垢痕と径0.7cm、深さ1.2cmの円孔が2ヶ所みられる。No36には狭（広）端面に「星瓦重」銘の刻印がある。当調査区では他にも「星瓦重」銘瓦1点、「星瓦増」銘瓦2点が出土したが、いずれも細片である。III類の平瓦は胎土が密で、焼成も良好。色調は青黒色を呈する。

#### （5）道具瓦

##### （5）-1 鳥糞瓦

I類（写真No42）…暗褐色シルト層内より1点出土した（No42）。軒丸瓦II類と同範瓦である。筒部以下は認識しえなかったが、外縁部が上端面、下端面ともに斜行していることや、瓦当部裏面の剥離痕が全周していることなどから鳥糞瓦と判断した。文様は軒丸瓦II類と同様に内区は左巻きの三巴文で、その外側に圓線がめぐり、外区は珠文で、その径および間隔も一致する。文様部は稜線が明瞭であり、その傾斜は中心寄りでは急で、外縁寄りでは緩やかである。筒部との接合技法は筒部を認識しえないので断定できないが、瓦当部裏面の剥離部には指頭圧痕を明瞭に観察しうるので、瓦当範に粘土塊をつめる際の指の痕跡を調整せずに筒部に接続したことが想定される。これは軒丸瓦II類の瓦当部裏面の丸瓦剥離部が平坦であったことと相違する。瓦当面にはハナレ砂がみられ、外縁部にはナデ調整を施し、裏面中央部には筒部剥離部にみられたような指頭圧痕にナデ調整を加えているが、凹凸を完全に平坦にするには到っていない。胎土には径1～5mmの砂粒や小レキを含む。焼成堅致。色調は明褐灰色を呈する。

II類（写真No43）…土坑2より1点出土した（No43）。瓦当部、筒部と雁振瓦部の一部まで残存している。文様は左巻きの三巴文のみである。瓦当部外縁幅は上面の方が下面よりも広い。製作技法は明確に指摘できないが、瓦当部、筒部、雁振瓦部を別個に成形して接合したことが想定される。上面は瓦当部から雁振瓦部まで一続きであるが、下面是筒部と雁振瓦部との間に段差があり、そこでは筒部内面を観察することができる。それによると、荒いナデ調整を施しているのが分かる。瓦当部外縁上端面には径0.3cm、深さ0.9cmの円孔が2ヶ所あり、これは節櫛を立てるための穴と思われる。瓦当部では銀化現象が顯著であり、筒部と雁振瓦部の上面全体には荒いミガキ調整が施され、下面にはナデ調整が施されている。胎土は密で、焼成は良好。色調は青黒色を呈する。

##### （5）-2 雁振瓦（写真No44）

暗褐色シルト層内を中心として数点検出したが、1種類しか認識しえなかった（No44）。全長34.5cmの玉縁式雁振瓦である。凹面広端縁の面取幅は6.3cmであるが、側縁には面取

りは施されていない。凸面及び端面にはケズリ調整の後にナデ調整が施されており、凹面には糸切り痕、布目がみられる（写真No64）。胎土は密で、焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

(5)- 3 棟込瓦

菊丸瓦及び輪違瓦が確認された。それぞれ2種類認識したが、銀化現象の著しい1群はそれぞれ図示しなかった。

菊丸瓦I類 … 土坑2より1点出土した（No45）。磨滅が著しい。文様は単弁の菊文で（写真No49）あるが、軒棟瓦No20のような花弁全体を立体表現したものではなく、花弁の周縁部のみを立体的に表現したものである。調整技法等に関しては磨滅が著しいため判然としない。胎土は密で、焼成はやや軟質。色調は暗青灰色を呈する。

菊丸瓦II類 … 現地表面上より数点採集した。軒棟瓦No20のような16弁の菊文を文様とする。（写真No50）瓦当面径6.5cmと5.8cmの2種が確認された。瓦当部外縁にはナデ調整、裏面にはケズリ調整を施す。胎土には径1mmの砂粒を含む。焼成は良好。色調は暗青灰色を呈する。

輪違瓦I類 … 土坑2より1点出土した（No46）。全長11.7cm、広端幅10.8cm、狭端幅6.3cm、高さ4.8cm、厚さ1.4cmである。凸面にはナデ調整を施し、凹面には布目がみられる。凹面狭端縁の面取幅は2cmであり、広端部には凹線状のくぼみが存する。横断面をみると、側面は丸味を帯びて外傾し、凹面側縁は内傾する。胎土は密。焼成はやや軟質。色調は青灰色を呈す。

輪違瓦II類 … 現地表面上より数点採集した。全長10.0cm、広端幅11.0cm、狭端幅3.5cm、高さ3.2cm、厚さ1.2cmである。調整はナデ調整を主体とする。胎土は密で、焼成は良好。色調は青黒色を呈する。

(5)- 4 面戸瓦（写真No45～48）

暗褐色シルト層を中心として20個体ぐらい出土したが、1種類しか認識しえなかった（No47～50）。それらはいずれも丸瓦胴部を横方向に分割して成形したものである。丸瓦1個体から2個体分を採取することができる。凸面の最終調整はナデ調整であるが、No48ではその前に縄叩きを施している。凹面の端縁はケズリによる面取の後にナデ調整を施し、中央部にはNo47では内叩き痕、No48ではナデ調整、No49では布目と「吊紐痕B」、No50では布目がみられる。この部分を観察することによって、丸瓦のどの部分を切り取ったのかが大体分かる。端面は丸瓦胴部側面に当たる部分では丸味を帯び、面戸瓦切り取り時に成形された部分はシャープであり、ケズリの後にナデ調整を施しているのが分かる。横断面の側縁部の形態、凹面中央部の面積の差などより、更に二群に分けられる（No47、48の一群とNo49、50の一群）。胎土には径1～5mmの砂粒や小レキを含む。焼成は良好。色調は

浅黄橙色もしくは灰白色を呈する。製作技法、調整技法、胎土、焼成、色調等から丸瓦Ⅲ類を分割したものと思われる。

(5)－5 鬼瓦（写真No54）

図示しなかったが、破片が数点、暗褐色シルト層内を中心として出土した。製作技法は明確に指摘しえないが、調整技法はナデ調整が主体であり、裏面にケズリ調整を施すものもある。胎土は密で、焼成は良好。色調は青灰色を呈する。

(6)棟瓦

軒棟瓦以外の棟瓦は埠棟瓦以外は認識しえなかった。

(6)－1 軒棟瓦（写真No19～21）

瓦当文様よりI～III類に分類しうる。軒平部は細片しか検出しえなかつたので、軒丸部を基準とした。いずれも土坑2より数点出土した。I類は左巻きの三巴文（No21）、II類は16弁の菊文（No20）、III類は無文である（No19）。瓦当部接合技法の判明しているのはNo21だけであり、それには裏面に格子キザミが施されている。調整はナデ調整が主体であり、銀化現象は瓦当面及び棟瓦部凹面（No19）で顯著である。胎土は密で、焼成は良好。色調は青黒色を呈する。なお、No19は隅瓦である。

(6)－2 埠棟瓦（写真No35）

現地表面上で数点採集したが、全形の分かれる破片はなかつた（No33）。方形板部の端部に幅4.8cmの目板部を幅2.6cm分だけ貼り付けたもので、接合する際に各々の相対する位置にキザミを施す。ナデ調整が主体であり、表面には顯著ではないものの銀化現象が、裏面にはハナレ砂がみられる。胎土には小レキを含み、焼成は良好。色調は明青灰色を呈する。

(7)文字瓦（写真No33、34、巻頭図版1）

文字瓦は7点出土した。No37、38は暗褐色シルト層内より出土した平瓦II類の破片で凸面に刻書を有する。これらが同一個体となるかどうかは確証はないが、内容から判断するとその可能性は高い。前者は狭端部片で、「明應」と刻書されており、後者は広端

五月

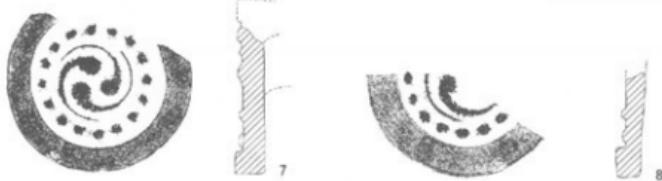
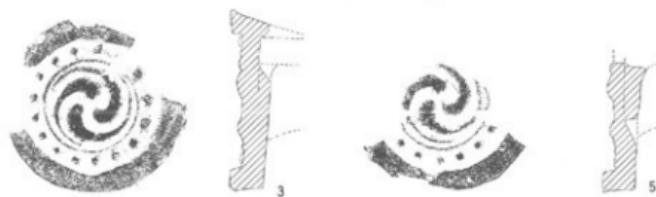
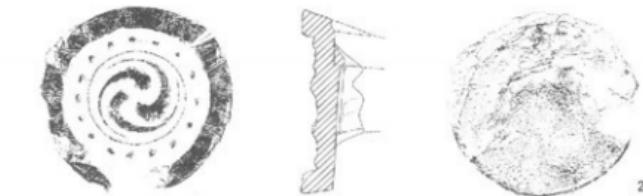
此トシ□」

部片で、「□事と刻書されている。これらが同一個体とすると文面は「明應…五月…アリ」

此トシ…事アリ」となる。No51は表採品で、細片のため部位の特定は難しいが、恐らく丸瓦胴部の広端部片であろうと思われる。凹面に「大工左衛門」と刻書されている。

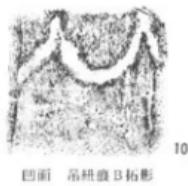
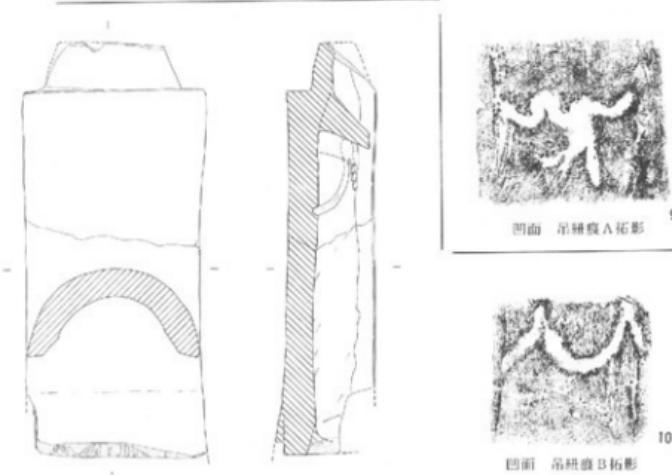
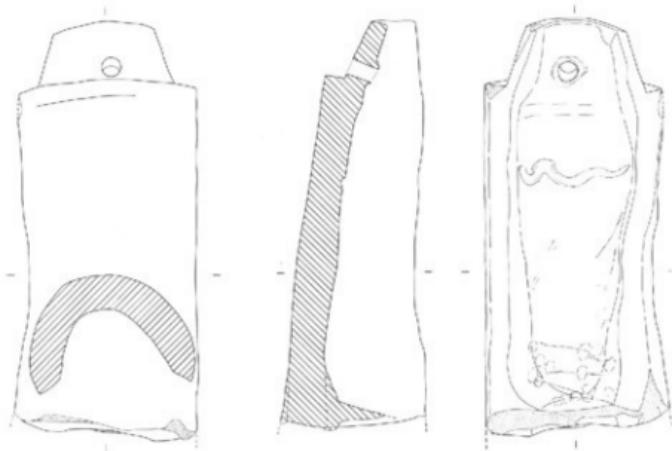
□□（花押）」

No36は土坑2出土品で、No52は表採品である。いずれも平瓦III類の破片で狭（広）端面に「星瓦重」の刻印がある。No53、54は表採品で、器種不明の細片であり、「星瓦增」の刻印がある。

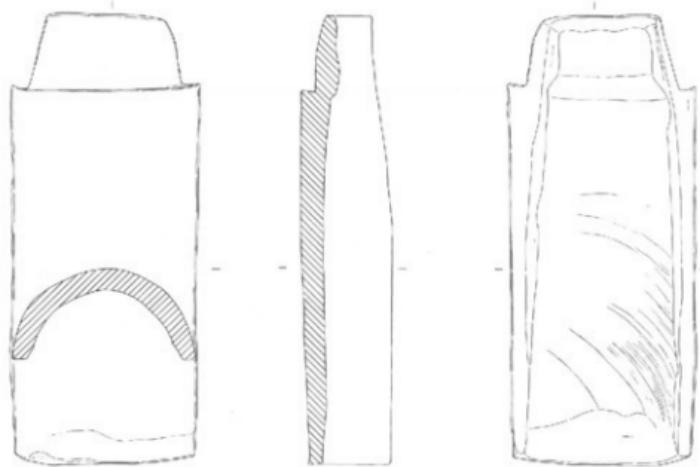


0 10 cm

第28図 第1次調査区出土軒丸瓦



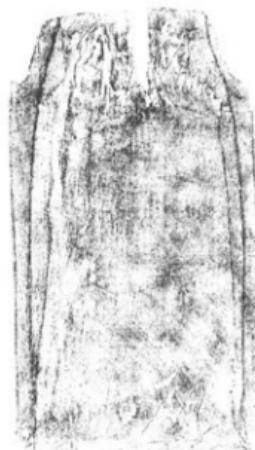
第29図 第1次調査区出土丸瓦(1)



0 10 cm



凸面拓影



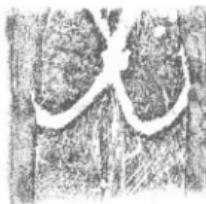
凹面拓影

11

第30図 第1次調査区出土丸瓦(2)



12-1



四面 吊鉤痕 B 拓影

13-2



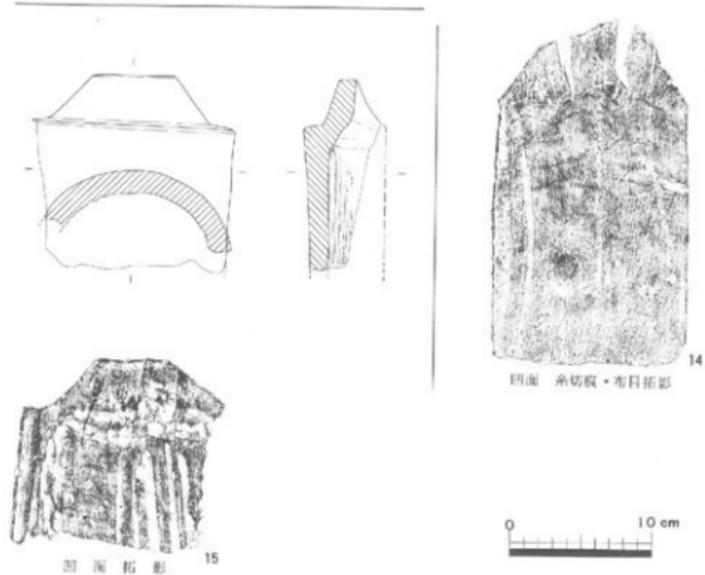
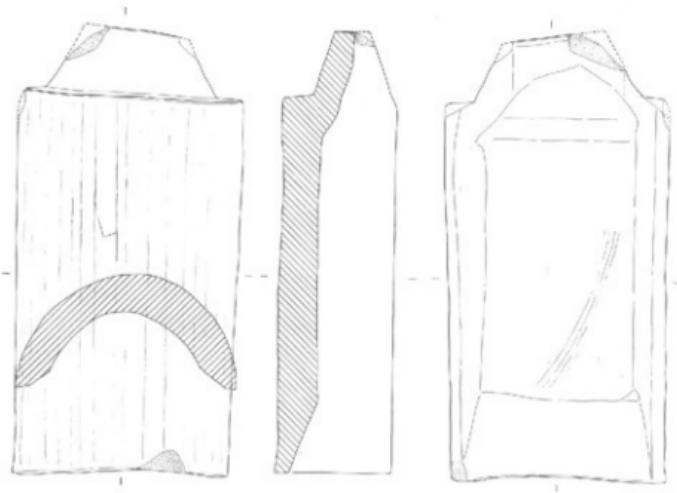
四面 吊鉤痕 B 拓影

12-2

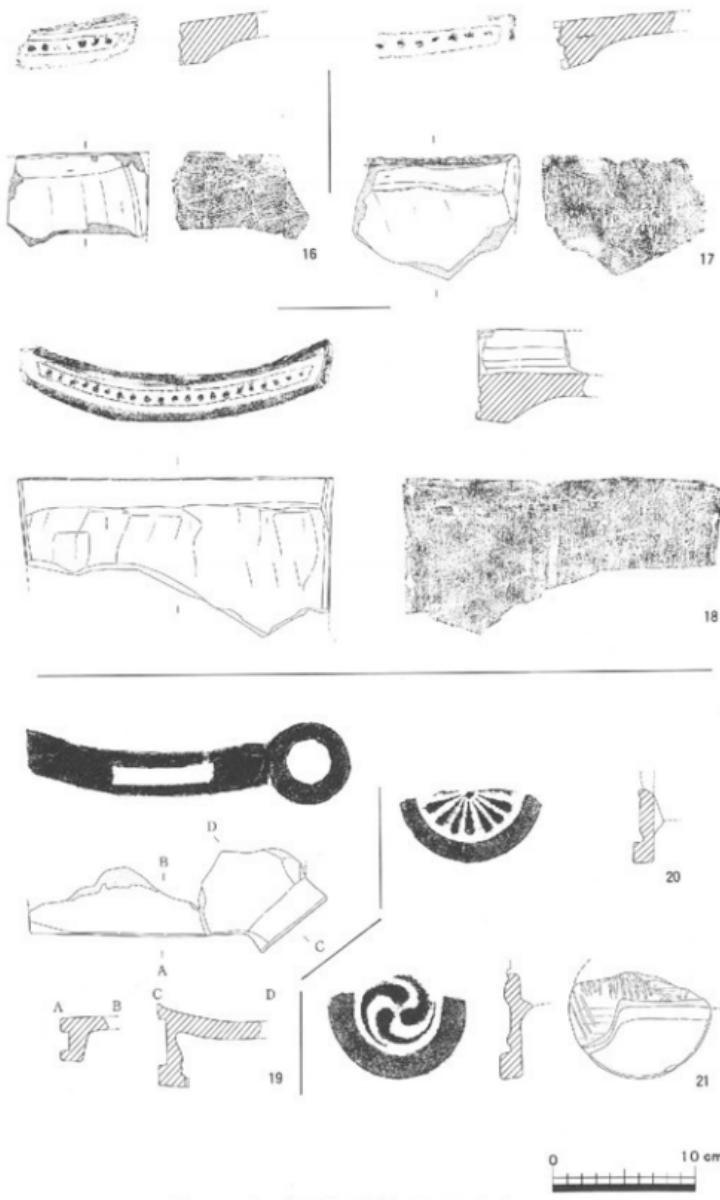


13-1

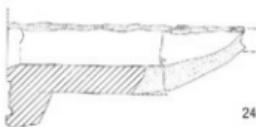
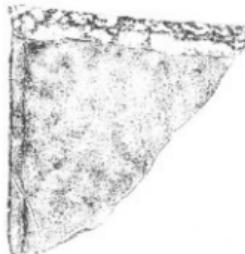
第31図 第1次調査区出土丸瓦(3)



第32図 第1次調査区出土丸瓦(4)



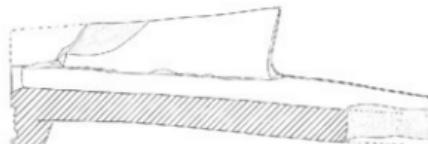
第33図 第1次調査区出土軒平瓦(1)・軒桟瓦



24



25



26



27



29



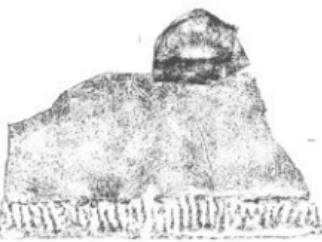
28



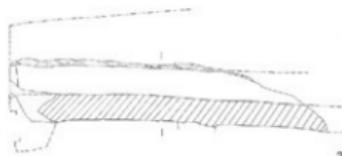
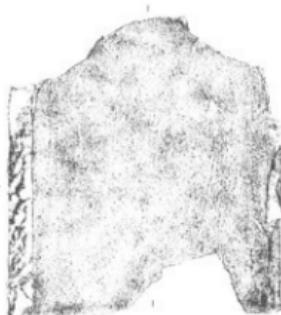
30



第34図 第1次調査区出土軒平瓦(2)



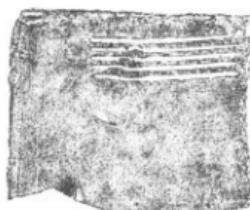
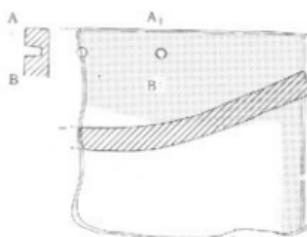
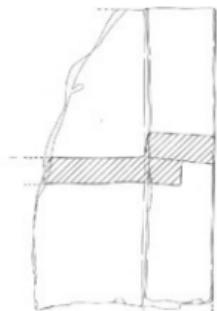
31



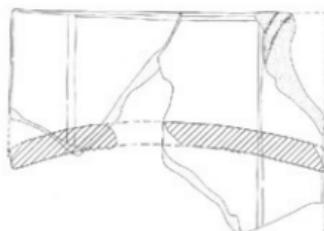
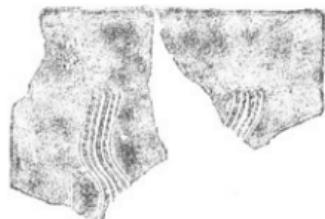
32



第35図 第1次調査区出土軒平瓦(3)



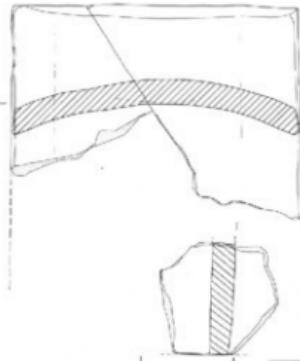
35



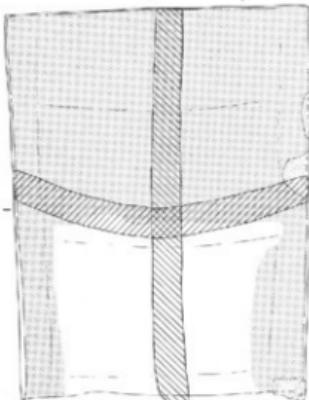
36



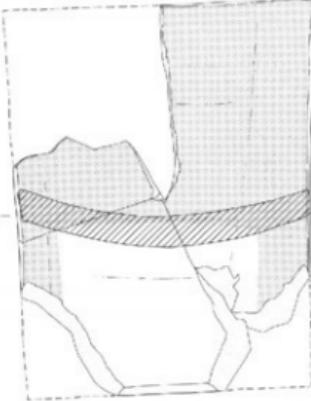
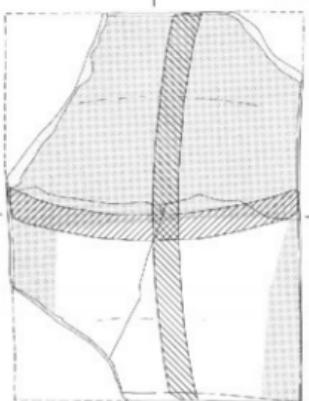
第36図 第1次調査区出土棟瓦・平瓦(1)



37



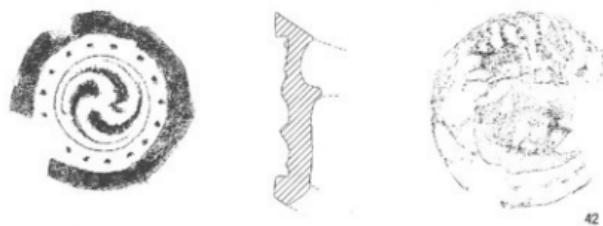
39



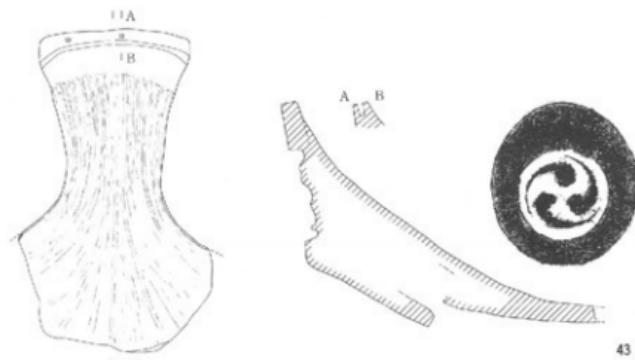
41

: 貢いた時に丸瓦・平瓦が重なる部分

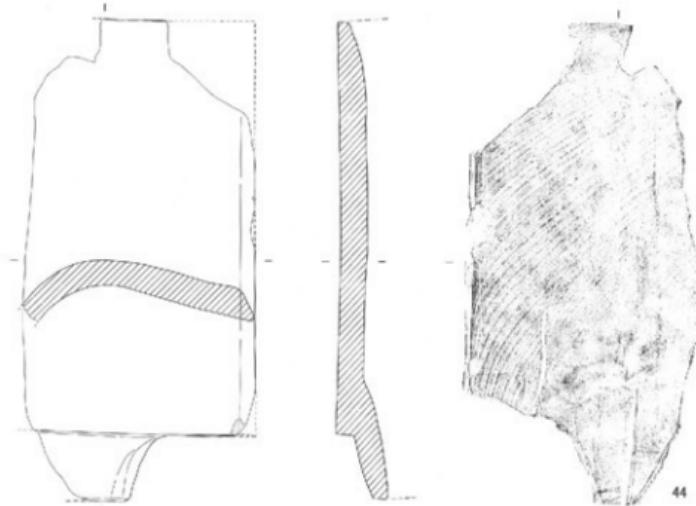
第37図 第1次調査区出土平瓦(2)



42



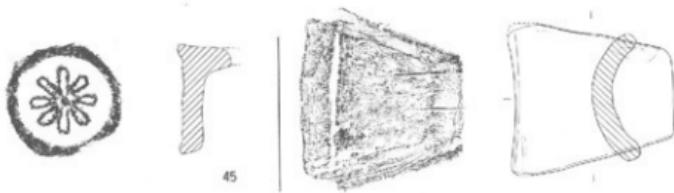
43



44

第38図 第1次調査区出土鳥食瓦・雁振瓦





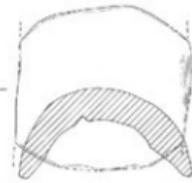
四面拓影



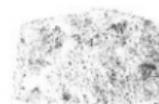
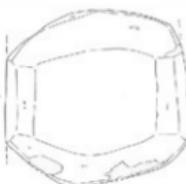
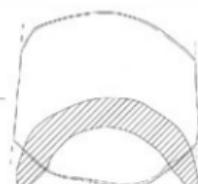
0 10 cm



凸面拓影



凹面 吊耕痕 B 拓影



凹面 布目拓影

第39図 第1次調査区出土棟込瓦・面戸瓦



第40図 第1次調査区出土文字瓦拓影

### 3. 変遷と年代

相対変遷は基本的には器種ごとの型式番号順となるが、それらの所属する時期を特定するのは、調査区北東部の暗褐色シルト層内出土品と土坑2出土品のみであり、それ以外は量的に少なくかつ遺構に伴わないので特定は難しい。それらに関しては、転用等の問題も絡むが、型式学的操作により決定したい。以下の（ ）内的一群がそれに相当する。

以上のことと踏まえて所属時期を考えると、I期には軒丸瓦I類、軒平瓦I・(II)類、(丸瓦I・II類)、(平瓦I類)、II期には軒丸瓦II類、軒平瓦III類、丸瓦III・(IV)類、平瓦II類、鳥衾瓦I類、雁振瓦、面戸瓦、鬼瓦、III期には軒丸瓦III類、丸瓦V類、平瓦III類、鳥衾瓦II類、棟込瓦、棟瓦が伴うことが考えられる。

次に、相対年代に対して実年代を与えていくわけだが、幸いにもII期の良好な瓦群の中に紀年銘を有する平瓦片が存在するので、それを基準に年代観を提示したい。

まずII期の年代だが、平瓦II類の破片に「明應」年間(1492~1531)銘を有する個体がある。しかも、このII期の瓦群は火災後に一括して廃棄されたもので、一部転用瓦と思しきものも見受けられるが、非常に均質である。これらのことより、II期の上限(もしくは大規模改修時)を15世紀末葉~16世紀前葉とすることができよう。更に、II期の下限となる火災はいつ頃発生したのかは、後続の瓦を観察する限り銀化現象が顕著であるのに対し、II期の瓦には殆ど認められないので、その年代は江戸時代までは下らないと思われる。以上より、II期の年代幅としては15~16世紀が与えられようか。



第41図 石塔残欠銘文拓影 Scale = ¼

つぎに、I・III期に関しては瓦より直接年代を知りえないので、他の資料などから推定していく。I期には15世紀以前の年代がまず与えられ、土坑1出土の瀬戸窯鉄釉四耳壺や、「延慶二年（1309）」銘石塔残欠（第41図）が同調査区のすぐ北側に存在することなどにより、14世紀を中心とした年代が考えられる。なお、三宅山に石清水八幡宮の莊園が設置された天暦三年（949）に新宮山八幡宮の創建年代を求めるることは現状ではできない。III期には、文化文政年間（1804～1829）編纂と伝えられている『星田名所記』所載の絵図（第42図）、天保八年（1837）成立と伝えられている絵図（第43図）及び18世紀中葉以降に描かれた絵図（第44図）などより、19世紀を中心とする年代が考えられる。なお、III期の下限は神仏分離令により星田神社に統合された明治五年（1872）である。

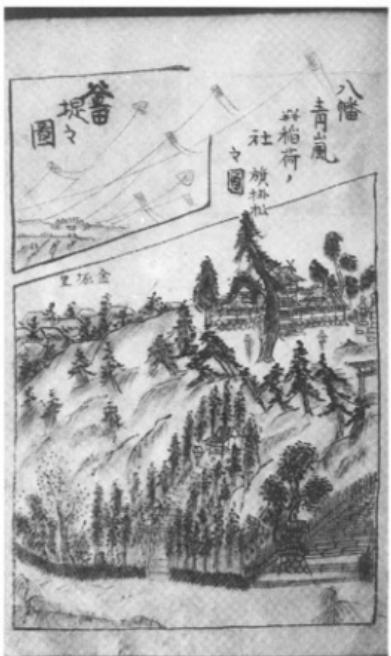
よって、I期には13～15世紀、II期には15～16世紀、III期には19世紀という年代観を提示しておく。なお、17、18世紀に関しては資料不足により神社の状況は判然としない。

#### 4. 建物との関係

先述した通り遺構の遺存状況が悪いので、瓦から建物を特定するのは不可能だが、ここでは大まかに推測を試みたい。

まずI期についてみると、瓦は少量しか出土せず、かつ縲まりもないので、推測すら難しいが、少なくとも櫛1～3に伴うことはないと思われ、可能性としてはその一部が中心建物に葺かれていたことを想定しうる。II期については均質で多量の瓦群を得られたが、肝心の中心建物群を検出しえなかっただけで、I期同様に推測困難である。しかしながら、

柵4に伴うことはまずないと思われる。III期についても中心建物群を検出しえなかつたが、『星田名所記』にやや詳細な絵図が掲載されているのでそれを参考にすると、瓦葺の建物は石垣の上を廻る塀と門だけであり、中心建物群にはみられない。このことより、塀棟瓦（No.33）は石垣の上を廻る塀に葺かれていた可能性が高いが、III期に属するそのほかの瓦



第42図 星田名所記

ていた部分で、残りの部分が他の瓦と重なっていた部分である。平瓦は広端部寄りに重ねるのだが、その重なる部分は16cmになるので、その半分が重なっていたことになる。通常は平瓦の2/3が重なった状態となる<sup>(9)</sup>ので、この瓦群の葺かれていた屋根の傾斜は緩やかだったことが想像される。更に、丸瓦III類を平瓦の列と列の間に並べるのだが、丸瓦どうしは玉縁部を介して各々連結する。以上より、屋根に葺く順序としては、軒平瓦→平瓦→軒丸瓦→丸瓦が考えられる。また、丸瓦の全長は法隆寺などの同時期の個体と比較すると約5cm短い<sup>(10)</sup>。よってII期の良好な瓦群は社殿に葺かれていたとも考えられるが、緩やかな傾斜の屋根および釘を用いない瓦の葺き方、またII期の瓦群と共に壁土も検出されていること等を考慮に入れると、『星田名所記』の絵図のような塀に葺かれていたと考

（大半が土坑2出土品）が全て門に葺かれていたとは思えない。更に、調査区では絵図にみられない建物1と建物2とを検出した。これらの建物は中心建物群と同時存在ではない可能性もあるが、土坑2出土の瓦群をみると複数の建物を想定しうるので、絵図の方に表現の省略があったとみるのが妥当であろう。

次に、瓦の葺き方<sup>(11)</sup>に関して考えてみたい。ここではII期の良好な瓦群を用いる。

軒平瓦II類No.25、31の平瓦部凸面中央部のヨコ方向の突帯は軒先の瓦座に固定するためのものであり、同じくNo.24~26、31、32の平瓦部凹面側縁部の鱗状突起は、（軒）丸瓦III類No.10の丸瓦部凹面狭端部の半円形の仕切り板に引っかけるためのものである。これらにより釘を用いなくても瓦を固定できる構造を想定しうる。また、平瓦II類No.39~41より瓦の重なり方を復元しうる。即ち、凹面の狭端部に14×14cmの白っぽくなつた部分（第37図のスクリーントーンを貼っていない部分）があり、それが外気に触れ



第43図 星田村古絵図（天保八年成立） Scale=1/4

えられないだろうか。遺構の遺存状況が悪いのが残念である。

##### 5. 文字瓦について

文字瓦にはII期に属するもの（No.37、38、51）とIII期に属するもの（No.36、52～54）がある。前者は刻書瓦で、後者は刻印瓦である。II期の刻書瓦には紀年銘を表記したもの（No.37）と瓦職人名を表記したもの（No.51）があり、III期の刻印瓦には生産地名と瓦職人名などがセットで簡略表記されている。いずれも年代や瓦職人名を知る上で貴重な資料である。紀年銘瓦については前項で触れたので、ここでは瓦職人（造瓦集団）について述べたい。

まずII期についてだが、刻書瓦No.51には「大工左衛門」と記してあり、これはII期の良好なセットをなす瓦の製作を統轄した人物もしくはそれに携わった人物名を表わすものと思われる。交野市および周辺の中世瓦の様相が不明であるので、いきおい他地域との比較に頼ってしまうが、例えば大和<sup>29</sup>や播磨<sup>30</sup>の例をみると、中世の造瓦集団として橘氏が浮かび上がってくる。この集団は広域に活動したと思われ、中世の造瓦集団名としては頻繁に



第44図 星田村古絵図（18世紀中葉以降成立） Scale=1/6

登場してくる。軒丸瓦の瓦当文に巴文を採用したり、丸瓦成形時に吊紐を用いるという画一的な現象が広域にみられる背景には、このような集団が関与していた可能性がある。しかも、この集団の統轄者にはしばしば「左衛門」という名前を見かける<sup>16</sup>ので、II期の良好な瓦群の製作に橋氏が関与したと言いたいが、今のところ橋氏が関与した瓦との同範囲

係は分からず、橋氏自体の動向も不明な点が多い。今後は地域ごとの瓦の実態を明らかにし、橋氏の詳細な動向も含めて浮き彫りにしていく必要がある。

次にⅢ期の刻印瓦についてだが、いずれも縦長の長方形の枠の中に「(地名)・瓦・(職人名)」という簡略表記を行っている。II期の刻書瓦との違いは、同期の刻書が表面に露出しない部分に施されるのに対し、III期の刻印瓦の刻印は表面に露出する部分に施されていることである。本調査では「星瓦重」と「星瓦増」の2種が認められた。類例を探したところ、現存する旧家などの土塀の軒先で多數見かけた。例えば、新宮山遺跡周辺では、新宮山八幡宮は廃絶した後に東方の星田神社に統合されたわけだが、その土塀の軒先でもやはり「星瓦増」刻印瓦を多數見かけたほか、「星瓦安」刻印瓦も多數みられた。また、新宮山東北方の民家の土塀の軒先でも「星瓦増」がみられ、他に「星瓦安」、「星瓦庄」、「高瓦房」などもみかけた。いずれも刻印と瓦当文が対応しているようである。

一方、交野市私部所在の北田家住宅の解体修理の際にも刻印瓦が発見され、「私瓦八」、「河私半」、「私瓦源」、「津田瓦新」などがあった。特に「私瓦八」に関しては、「私部村寛政九年巳二月十日八兵衛」という刻書瓦および八兵衛の寛政九年(1797)の瓦見積書も現存しているので、寛政九年に私部の瓦職人八兵衛が北田家住宅の主屋の葺き替えに際して、瓦の器種と個数および値段を見積った状況が分かる点で興味深い<sup>24</sup>。また、他の地域に目を転じてみると、堺市出土の同様の刻印瓦に表記されている瓦職人の中には、『大坂瓦屋仲間記録』という株仲間の一連の文書に登場する人物もある<sup>25</sup>。このように、刻印瓦に表記されている瓦職人の中には文献と対応する例があるので、今後の資料の蓄積が望まれる。ところで、このような刻印瓦は18世紀後半以降に頻繁にみられるようになり、その刻印部位等を考えると焼塙壺のような商標としての性格が考えられる。また、その分布は大阪府岬町の谷川瓦<sup>26</sup>のように大阪、堺、京都、徳島、和歌山などの広域にみられる例もあるが、瓦職人の所在地の近辺に分布する例の方が一般的であるようである。例えば、交野市内に限って言えば、新宮山八幡宮には星田地区の瓦職人が、北田家住宅には私部地区の瓦職人が主体的に供給している。よって、かような例を手探っていけば、近世における瓦の流通状況の一端を知ることができるのではないかと期待する。

## 6. おわりに

本稿では事実報告文には慎重を期したが、まとめの項ではやや推測を混じえて論じてしまった。今後適確な視点、方法で中近世瓦を当時の社会の一端を解明することに役立てねばならない。それにはまず、地域的な様相を明らかにしていかなければならないだろう。特に、生産遺跡(瓦窯)の実態把握は有効な指標になりうると思うが、現時点でははっきりしない。このような点も含めて今後の調査に期待したい。いずれにせよ、新宮山遺跡の瓦群が交野市の中近世を語る際に役立てば幸いである。

## 註

- (1) 各部位の名称は文献1、P20を主として参照した。
- (2) 平瓦部各部位の名称は文献2、P61を主として参照した。
- (3) 各部位の名称に関して参照したのは註(1)と同じ。
- (4) 文献4では「抜取縫」、文献1、3では「吊縫」と呼称され、従来は成形台（模骨）から粘土円筒を引き離すための機能を有すると考えられていたが、最近では成形台に巻き付けた粘土円筒がズレ落ちるのを防ぐ（吊る）ための機能を有すると想定する向きもある。中世の丸瓦の凹面に普遍的にみられる痕跡であり、中世の丸瓦の造瓦技法を考える上で重要な指標になりうると考える。
- (5) 近世丸瓦凹面には通常長軸に対して垂直方向にヨコ筋がみられるが、本調査で採取した近世丸瓦（丸瓦V類）にはその痕跡を見いだしうるような個体を認識できなかった。また、中世以前の丸瓦（本調査ではI～IV類）の凹面にはナナメ筋（糸切痕）がみられ、両者の違いは粘土塊から粘土板を切り出す際の工具もしくはその工具の引き方の違いに起因するようである。文献1～5参照。
- (6) 各部位の名称に関して参照したのは註(2)と同じ。
- (7) 文献6、P619～622及び文献7、P107参照。
- (8) 文献7、P107参照。
- (9) 文献1、P24参照。
- (10) 文献8参照。
- (11) 文献9参照。
- (12) 文献9、P677参照。
- (13) 文献10、P97～99参照。
- (14) 文献11参照。
- (15) 文献11参照。

## 参考文献

1. 小林謙一、佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊河留我』10 1989年 小学館
2. 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58-2 1972年
3. 久保智康「近世中～後期越前における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』7 1989年
4. 大橋潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」『奈良国立文化財研究所学報第49冊 研究論集IX』1991年
5. 森田克行「畿内における近世瓦の成立について」『揖津高槻城』1984年 高槻市教育委員会
6. 木津博明「中世瓦について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域 本文編』1986年 群馬県教育委員会はか
7. 西和夫『図解 古建築入門』1990年 彰国社
8. 佐川正敏「法隆寺の瓦大工橘氏の活躍」『法隆寺の至宝』15 1993年 小学館
9. 田中幸夫「播磨で活躍した室町・桃山時代の瓦工集団」『今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢』1990年
10. 福岡憲はか『重要文化財 北田家住宅 主屋・表門・乾蔵・北蔵・土塀（含裏門）・撥木納屋 修理工事報告書』1988年
11. 嶋谷和彦「堺・大坂出土の刻印瓦—堺瓦を中心にして」『大阪府埋蔵文化財研究会（第27回）資料』 1993年

## 凡 例

1. 詳細は本文を参照。

2. ( ) 内は推定。

3. 略号は以下の通り。

銀：銀化現象（第1表～第4表）

黄：明黄褐色シルト層内（第1表～第4表）

赤：暗褐色シルト層内（第1表～第4表）

菱唐：菱花唐草文（第3表）

宝唐：宝珠唐草文（第3表）

第1表 軒丸瓦系遺物一覧表

(単位: cm)

番 号	直 径	内 区		外 区		外 緑		瓦当厚	接合状況		時期	出土 遺構	型 式	実測図	写 真	備 考
		径	文 横	幅	丈	幅	高		瓦当部	丸瓦部						
1 (15.0)	8.4	右三巴	1.3	珠	1.5	1.0	1.2	刺格子状 隆起	(刺格子) (キヅミ)	I	黄	軒丸瓦I類	No.1	No.1		
2 13.5	6.9	左三巴	1.7	珠	1.5	1.0	1.4	平 坦	ナナメ キザミ	II	赤		No.2	No.2	瓦当文様B	
3 12.6	6.7	左三巴	1.4	珠	1.5	0.8	2.0	平 坦		II	赤		No.3	No.3	C	
4 (13.0)	6.8	左三巴	1.6	珠	1.5	1.2	1.6			II	赤		No.4	No.4	C	
5 (13.6)	(7.2)	左三巴	1.5	珠	1.5	1.0	1.6			II	赤		No.5	No.5	C	
6		(左三巴)	1.3	珠	1.5	1.1	1.6		ナナメ キザミ	II	赤		No.6	No.6	B	
7 13.0	5.5	左三巴	1.8	珠	1.7	0.5	1.6	ナナメ キザミ		III	土坑2		No.7	No.7	銀	
8		(左三巴)	1.6	珠	2.1	0.7	1.2			III	土坑2		No.8	No.8	銀	
9 13.0	6.9	左三巴	1.2	珠	1.6	0.9	1.6	凸凹著し		II	赤	鳥食瓦I類	No.2	No.2	瓦当文様A	
10 10.4	6.3	左三巴			上 3.6 下 1.6	1.0				III	土坑2		No.3	No.3	銀	
11 8.1	6.2	8弁菊			1.1	0.3	1.5			III	土坑2	軒丸瓦I類	No.5	No.5	銀	
12 6.5	4.9	16弁菊			0.8	0.4	1.5			(III)	地表		No.6	No.6	銀	
13 5.8	4.2	16弁菊			0.8	0.5	0.9	ナナメ キザミ		(III)			No.51	No.51	銀	
14 9.8	6.3	左三巴			1.8	0.8	0.7	格子 キザミ		III	土坑2	軒丸瓦I類	No.21	No.21	銀	
15 (10.2)	(7.8)	(16弁菊)			1.4	0.7	0.8			III	土坑2		No.20	No.20	銀	
16 6.0	3.2	無 文			1.4	0.6	0.8			III	土坑2		No.19	No.19	隅 瓦 銀	

第2表(1) 丸瓦系遺物一覧表

(単位: cm)

番 号	全長	脛 部				凹 面				凸 面	時期	出土 遺構	型 式	実測図	写 真	備 考	
		長	幅	高	厚	布目	糸痕	崩痕	内凹 き痕	側面取 扱痕							
1 31.8	26.5	12.9	6.5	1.5	○	○			A	3.7	(I)	地表	丸瓦I類	No.1	No.0, 55, 56		
2 28.9	24.8	11.7	9.2	2.4	○	○	A		A	ナデ	(I)	赤		No.9	No.57, 58	瓦当部剥離	
3 29.2	25.8	12.1	6.5	2.0	○	○	B		B	ナデ	II	赤		No.10	No.61		
4 29.0	24.8	12.0	6.4	1.8	○	○	B		B	5.1	ナデ	II	赤		No.12	No.62	
5 29.9	26.1	12.6	6.1	1.6	○	○	B		B	4.6	ナデ	II	赤		No.13	No.64, 59, 60	
6 33.0	27.4	14.0	6.9	2.4	○	○	B		B	7.0	ナデ	II	赤				
7 29.3	25.5	11.6	6.7	2.2	○	○	B		B	4.7	ナデ	II	赤				
8 29.7	26.3	11.6	6.4	1.8	○	○	B		B	4.8	ナデ	II	赤				

第2表(2) 丸瓦系遺物一覧表

(単位: cm)

番号	胴部				凹面				凸面		時期	出土遺構	型式	実測図	写真	備考	
	全長	長	幅	高	厚	布目	表面質	胎動風	内叩き痕	側面	底面						
9	29.7	26.1	11.0	6.1	1.7	○	○	B		B	5.6	ナデ	II	赤	III		
10	29.6	25.7	12.1	6.4	2.1	○	○	B		B	5.8	ナデ	II	赤	III		
11	30.2	25.7	12.1	5.8	2.1	○	○	B		B	5.4	ナデ	II	赤	III		
12	29.7	25.7	11.7	6.2	1.5	○	○		○	B	4.2	ナデ	II	赤	III		
13	31.4	26.7	15.5	8.2	2.7	○	○			B	5.5	ヘラナデ	(II)	地表	IV	No14 No15, 63	
14				6.8	1.5				○	B		銀	III	土坑2	V	No15 No9	
15	34.1	29.6			1.9	○	○				6.3	ケズリ →ナデ	II	赤	櫛状瓦	No44 No44, 64	
16	11.3		(5.7)	2.1	○				○			ナデ	II	赤	面戸瓦	No47 No45	
17	11.5		(5.9)	1.9								脚印き →ナデ	(II)	地表	〃	No48 No46 四面ナデ	
18	12.2		(3.6)	1.5	○			B				ナデ	II	赤	〃		
19	11.6		12.3	6.4	2.2	○		B				ナデ	II	赤	〃	No49 No47	
20	12.3		12.8	6.4	2.1	○						ナデ	(II)	地表	〃	No50 No48	
21	11.1		11.6	6.4	2.1	○		B				ナデ	(II)	地表	〃		

第3表 軒平瓦系遺物一覧表

(単位: cm)

番号	上弦幅	下弦幅	厚さ	弧度	内区			外区		縁部		凹面		凸面		時期	出土遺構	型式	実測図	写真	備考
					文様	厚	厚	高	形態	キザミ		突起	帶								
1			3.5		連珠	1.7	0.4	0.5	0.4	曲線						(I)	地表	軒平瓦 I種	No17	No17	
2			2.9		連珠	1.1	0.3	0.7	0.3	曲線						I	黄	I	No16	No18	同上
3	21.5	21.6	3.3	3.2	連珠	1.1	0.3	0.7	0.3	曲線	-					(I)	赤	I	No18	No16	〃
4			4.3		菱唐	2.6	0.2	0.9	0.6	(段)						(I)	地表	II	No22	No22	
5								0.9	0.6	段	○				I~II	黄	III	No23	No23		
6			4.1	(3.1)	宝唐	2.6		0.7	0.5	段	○	刺突			II	赤	III	No24	No29	瓦当 文様B	
7	21.9	22.0	4.5	1.4	宝唐	2.2		1.0	0.5	段	○	ナナメ ヨコ キザミ	コ キザミ		(II)	地表	III	No25	No28	A	
8			4.0	(1.5)	宝唐	2.5		0.9	0.6	段	タテ	刺突			II	赤	III	No26	No30	全長 30.1cm	
9					宝唐			1.0	0.5	段	ヨコ				II	赤	III	No27	No24	瓦当 文様A	
10					宝唐			1.1	0.5	段	タテ				II	赤	III	No28	No25	A	
11					宝唐			1.1	0.5	段	○				II	赤	III	No29	No25	B	
12					宝唐			0.9	0.5	段	○				II	赤	III	No30	No27	B	
13			3.9		宝唐	2.4		0.9	0.5	段	タテ	刺突	○	II	赤	III	No31	No31			
14	21.2	21.5	4.0	2.5	(宝唐)	1.8		1.1	0.6	段	ナナメ	ヨコ キザミ	コ キザミ		II	赤	III	No32	No32 No65	四面切口 →ナデ	
15			3.9		宝唐	2.0		1.0	0.5	段	○				II	赤	III				
16			4.0		宝唐	2.3		0.9	0.5	段	ナナメ	ナナメ キザミ			II	赤	III				
17	17.0	16.5	3.0	1.6	無文	1.3		1.0	0.6	段					III	土坑2	軒平瓦 II種	No19	No19	瓦瓦 番	

第4表 平瓦系遺物一覧表

(単位: cm)

番号	全長	広端幅	狭端幅	厚さ	凹面	凸面	時期	出土遺構	型式	実測図	写真	備考
1				2.2	糸切→繩印→ナデ	ハナレ砂→繩印	(I)	地表	平瓦1類	No34	No35、 No36、 No37	
2	28.3	21.5	19.9	2.1	ナデ	ハナレ砂	II	赤	II	No39	No39	凸面側線部 凸線状隆起
3	27.6	(21.1)	(20.3)	1.8	ナデ	ハナレ砂	II	赤	II	No40	No40	
4	27.6	(22.0)	(20.1)	2.2	ナデ	ハナレ砂→ナデ	II	赤	II	No41	No41	
5				20.2	1.8	ナデ	ハナレ砂	(II)	地表	II	No37	文字瓦(狭端部片)
6				1.6	ナデ	ハナレ砂	II	赤	II	No38		△(広端部片)
7	28.7			19.4	1.8	ナデ	ハナレ砂	II	赤	II		
8				20.0	1.6	ナデ	ハナレ砂	II	赤	II		
9				20.4	1.7	ナデ	ハナレ砂	II	赤	II		
10		21.0		1.7	ナデ	ハナレ砂	II	赤	II			
11				19.5	1.9	ナデ	ハナレ砂→ナデ	II	赤	II		
12				19.9	1.8	ナデ	ハナレ砂→ナデ	II	赤	II		
13				20.4	2.1	ナデ	ハナレ砂→ナデ	II	赤	II		
14				1.7	銀	ハナレ砂	III	土坑2	III	No35	No37	凸面線刻文様(=)
15		22.3		1.6	銀	ハナレ砂	III	土坑2	III	No36	No38	凹面線刻文様(△)、 端面刻印
16				1.8	銀	ハナレ砂	III	地表	解説瓦	No33	No35	
17				1.7	銀	ハナレ砂	III	地表	△			

## 第4章　まとめ

### I期（第1遺構面）

第2次調査区において、この時期に該当する明確な遺構は確認できなかったので、第1次調査区について述べる。尾根東端部で平面形が半円形、方形状を呈する遺構（弥生土器の破片やサスカイトのフレークが出土しており弥生時代の竪穴住居と認識できるのではないだろうか）が廃絶し、それらが長年月のうちに風化を受けて凹地状になったところへ、神社が成立したようである。その際に、弥生時代の遺構群の大半は削平されてしまったのだろう。

社殿は尾根線上の高いところ（柵1～3に囲まれた空間とその周辺）を選地してもうけられたようである。中心建物は検出しえなかつたが、柵1がそのすぐ外側を囲む施設だとすると、東面もしくは西面する建物を想定しうる。幕末に記された『星田名所記』の絵図に見える社殿が東面していることからも、同一の方向であったのではなかろうか。第1次調査区土坑1出土遺物および明黄褐色のシルト層内出土瓦より、13～15世紀の年代を考えられる。

### II期（第2遺構面）

I期の遺構群とその周辺に明黄褐色シルトによって整地をして、神社境内地を拡張した。この時にI期に削平を免れた尾根東端部の弥生時代の遺構群も完全に埋まつたようである。第2次調査区においては、生活財を中心出土しており、第1次調査区が祭祀関係の遺物のみを出土することに比べて対照的である。この時期の遺構の遺存状況は第1次調査区では悪く、中心建物はその所在地を特定するに到らなかつた。また、この時期の建物群は最終的に火災に見舞われた模様である。火災後に投棄された多量の瓦（「明應」年間銘瓦あり）より15～16世紀の年代が与えられる。

同時期の建物の状況はよく分からぬが、もと愛染律院が所有し、明治三年に滋賀県大津市田上黒津町の光明寺に移された梵鐘の銘文より、文安二年（1445）には新宮山の山頂に六小社があり、それ以外に六寺院があったことがわかる。社殿域の拡大及び第2次調査区において生活財を主として出土する遺構が形成されていることなどから、梵鐘銘が示すような状況を首肯しうる。

〔前略〕河内国新宮山者八幡宮鎮座之地也郡云大交野邑云星田山勢孤起前臨清池林樹  
疊翠芳艸抜英具創營之興年代深遠不識為誰樓台殿塔之大觀亦無知奈何文献不徵遺憾於後世  
嗚呼緣起之使爾乎何神明之不德驗文安二年所錄猶六支院有日阿弥陀日弥勒日宝珠日宝藏日  
宝積日愛染今之所在唯愛染一院也山頂有大社傍鎮六小社謂神后若宮武内高良石清水弁天女  
也有塔伝曰八幡宮刹落受戒取髮於此亦無記磨日緣由其塔即延慶二年之所造立也（後略）〕

（滋賀県大津市田上黒津町光明寺所有梵鐘第1、2区銘文）



第45図 滋賀県大津市田上黒津町  
光明寺所有梵鐘



第46図 新宮山遺跡所在石造物  
(左 延慶二年の石塔残  
欠、右 天文十七年銘の  
宝篋印塔)

### III期（第3遺構面）

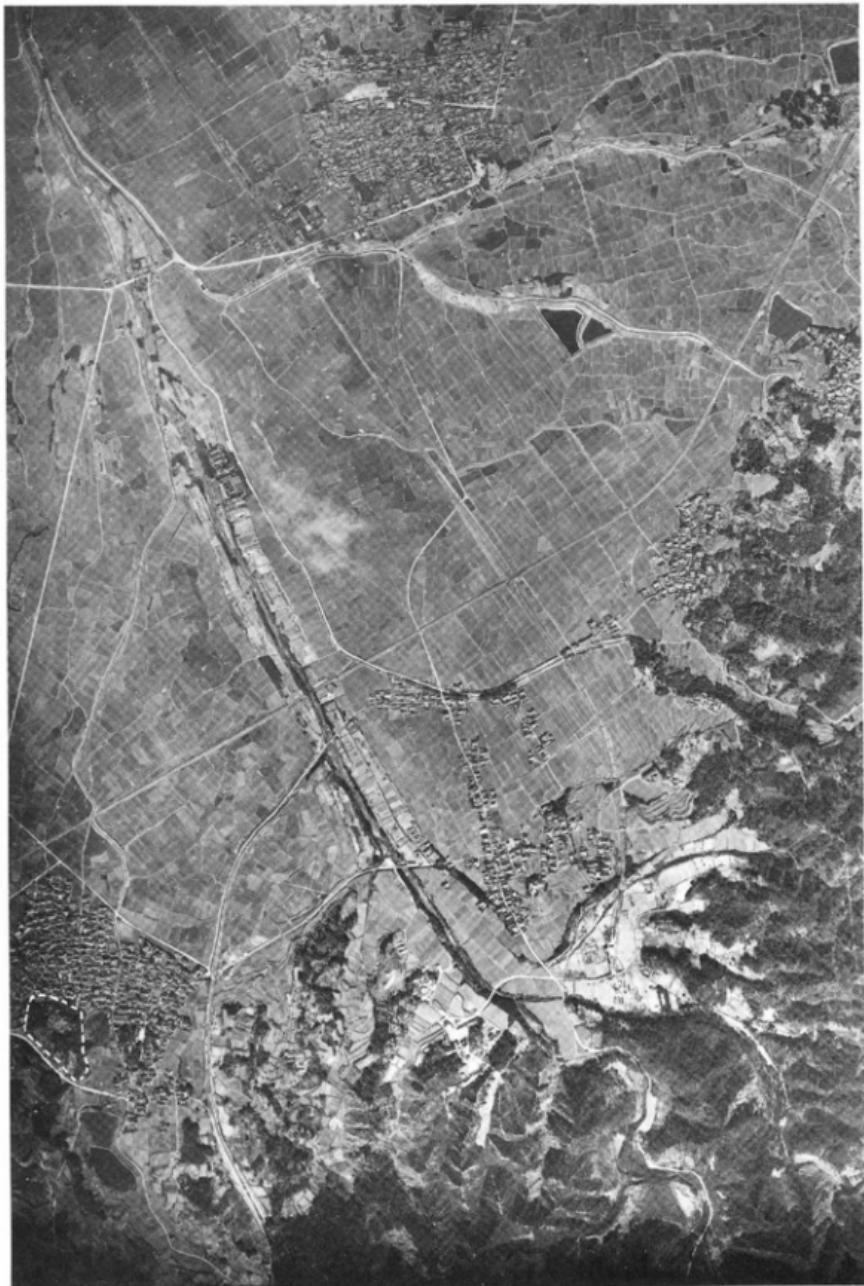
第1次調査区のII期の遺構群とその周辺に暗褐色シルトで整地を行い（特に、本調査区北東部では火災により使用不能となった瓦などを集中的に投棄して整地している）、火災により倒壊した建物を建て直したと思われる。この時期の遺構の遺存状況も悪いが、特に本調査区南半部では遺構を全く検出できなかったことと、本調査区北側の宝篋印塔周辺で石垣の残骸と思しき石材を発見したことにより、当初は本調査区南半部では遺構面よりも上位に石垣を組んで社殿を建てていたが、神社の移転に伴い石垣ごと削平してしまったことが想定される。この時期の様子は、『星田名所記』所載の絵図に描写されている。同調査区土坑2出土遺物などより江戸時代を中心とした年代が考えられる。

以上、第1次調査区では明確な建物遺構は検出できなかった。その成因は風化、削平等いろいろと考えられるが、1つには建物の構造そのものにもあったと思われる。即ち、簡単な土台状施設の上に井桁状に横材を渡して、その上に柱を受けるという構造が考えられる。これならば社殿が廃絶すると柱の痕跡は地面にはほとんど残らない。小型の社殿ならば全く残らないであろう。特に中近世の社殿でよく見かける工法である。しかしながら、この状況を積極的に支持してくれる痕跡はない。むしろ、遺構の空白域を如何様に解釈するのかということを起点とした発想だからである。

一方、第2次調査区では、III期の明確な遺構は検出されておらず、本調査区はII期のみにその遺構の存続時期が限定される。よって第1次調査区の社殿域の規模縮小に連動し、第2次調査区は廃棄されたものと考えられる。

# 図 版

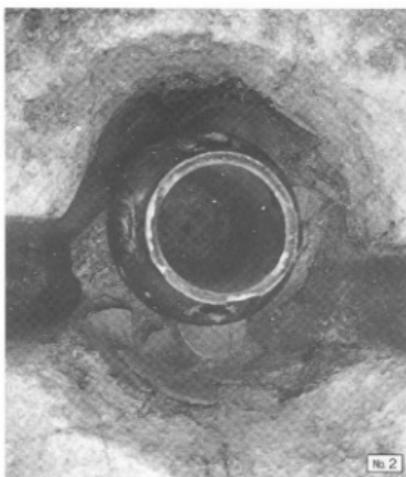
図版1 遺跡周辺航空写真（昭和23年3月19日撮影・点線部が遺跡）



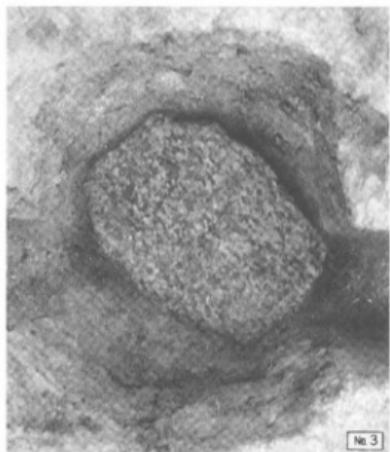
図版2 第1次調査区



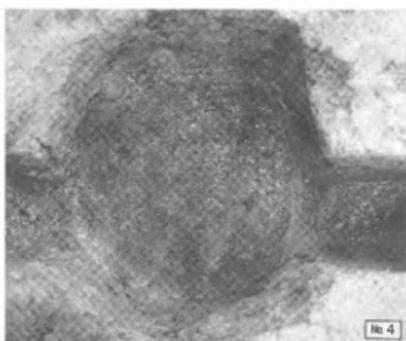
No. 1



No. 2



No. 3



No. 4



No. 5

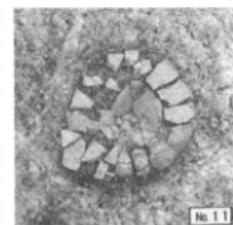
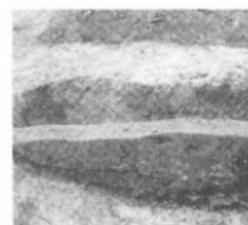
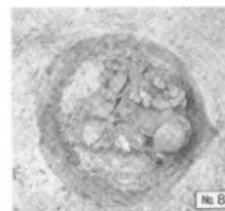
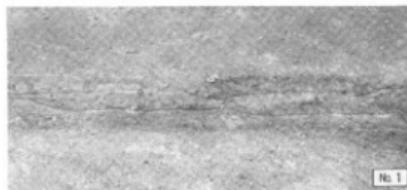
No. 1 土坑1蓋石検出状況

No. 3 土坑1台石検出状況

No. 2 土坑1瀬戸窯鉄釉四耳壺及び土師質皿検出状況

No. 4 土坑1完掘状況

No. 5 土坑1断面 (西から)



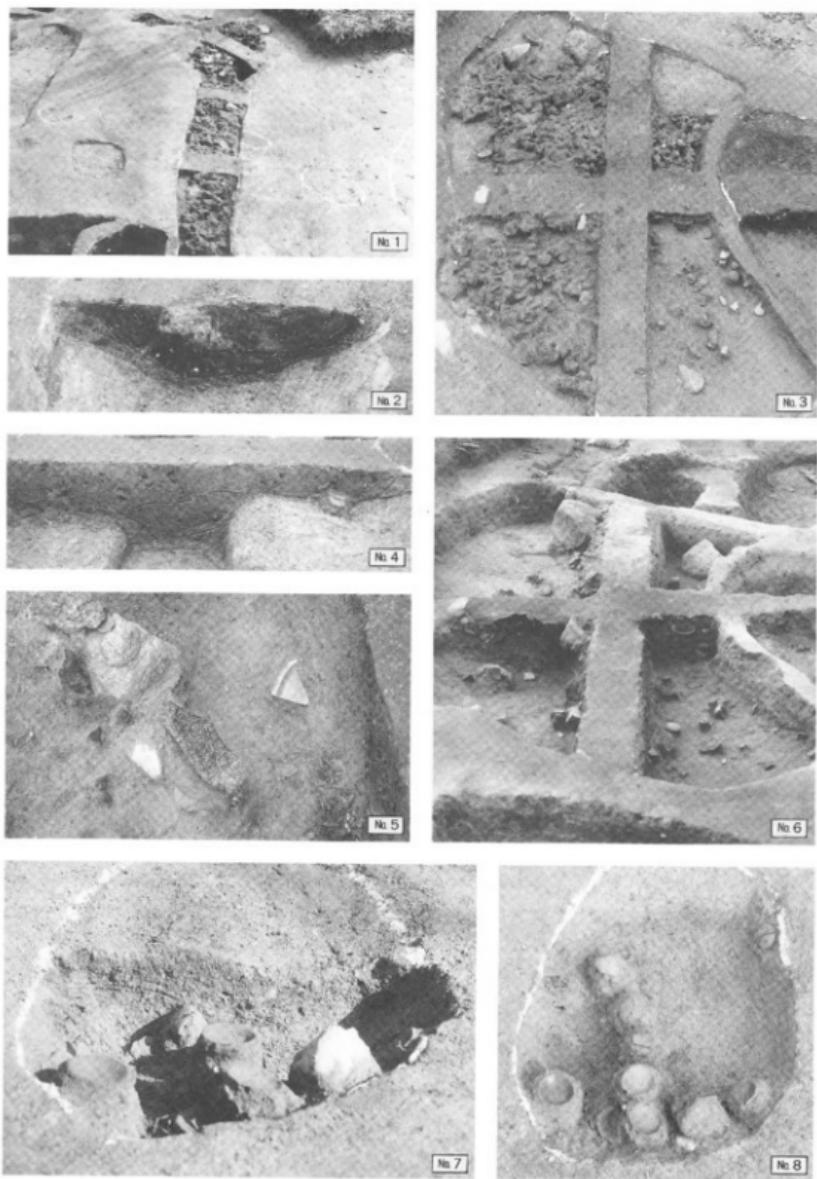
No. 1 第1次調査区北東部東西断面（A-B） No. 2 調査区北東部柵溝完掘状況

No. 3 建物2完掘状況 No. 4 建物1完掘状況 No. 5 青銅製火焔飾金具検出状況

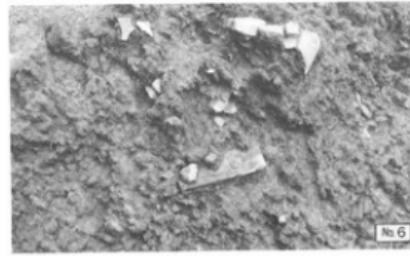
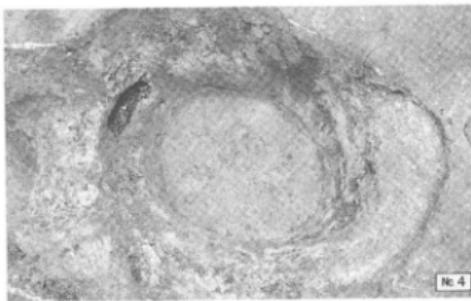
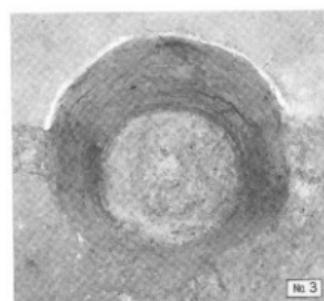
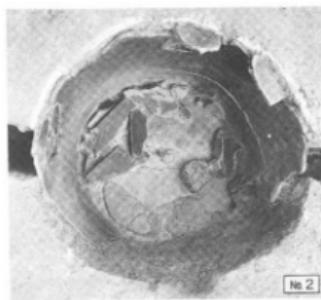
No. 6 青銅製三鉢飾金具検出状況 No. 7 土坑3断面（南から） No. 8 土坑3遺物検出状況

No. 9 土坑4遺物検出状況 No. 10 土坑2断面（南から） No. 11 土坑2土師質皿検出状況

図版4 第2次調査区



No.1 溝2検出状況 No.2 溝2断面（西から） No.3 土坑1壁土検出状況  
 No.4 土坑2断面（西から） No.5、6 土坑2遺物検出状況 No.7 土坑3断面（南から）  
 No.8 土坑3遺物検出状況

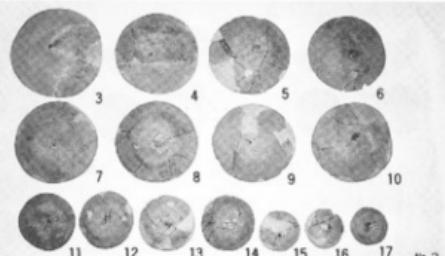


No.1 土坑5断面（南から） No.2 土坑5瓦質発検出状況 No.3 土坑5完掘状況  
No.4 土坑4完掘状況 No.5 土坑7断面（北から） No.6 土坑7遺物検出状況  
No.7 土坑6断面（西から） No.8 調査区中央部区画溝瓦質羽釜検出状況

図版 6 第1次調査区出土遺物



No. 1



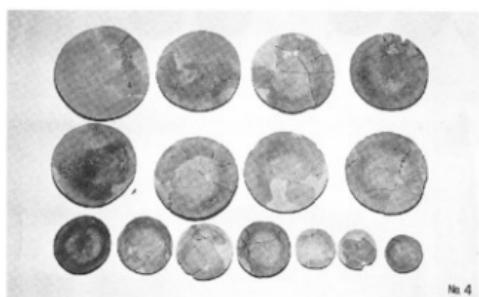
No. 3



No. 2



No. 5



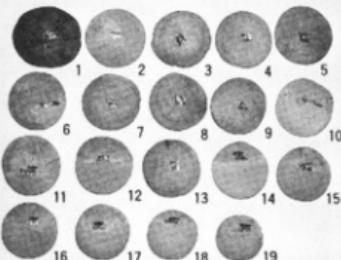
No. 4



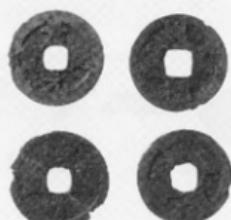
No. 6



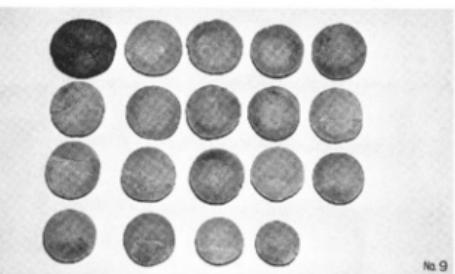
No. 7



No. 8



No. 10



No. 9

No. 1～4 土坑1出土遺物  
No. 5 土坑2出土遺物  
No. 8、9 土坑4出土遺物

No. 6、7 土坑3出土遺物  
No. 10 調査区北側暗褐色シルト層出土遺物（宋錢）

図版 7 第2次調査区出土遺物



No. 1



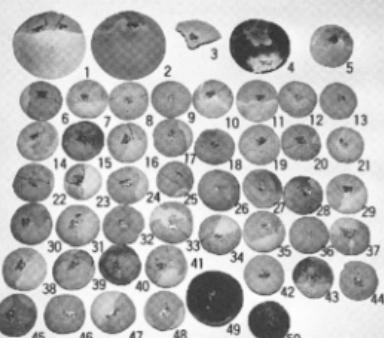
No. 2



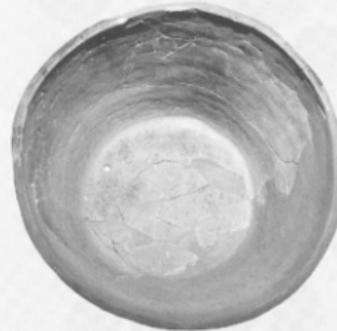
No. 7



No. 8



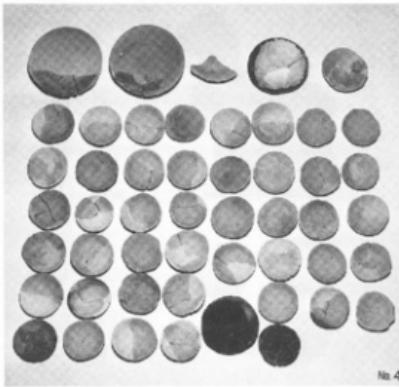
No. 3



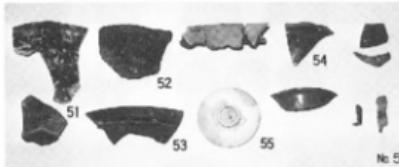
No. 9



No. 10



No. 4



No. 5



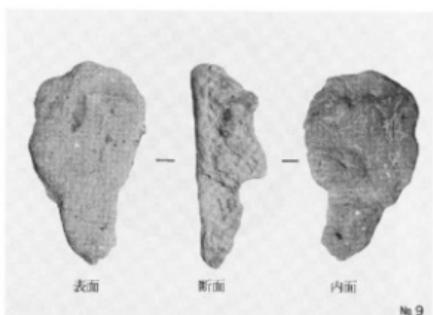
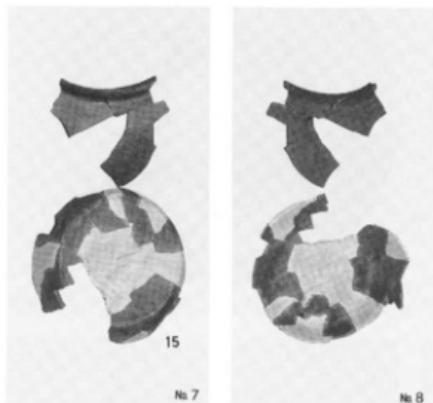
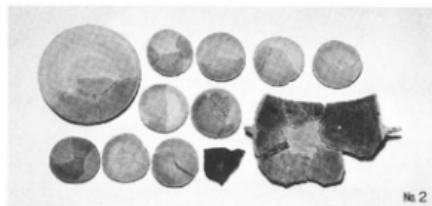
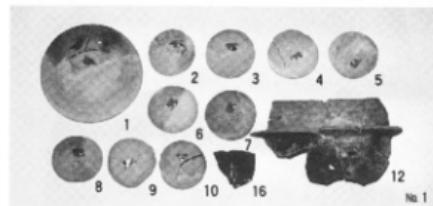
No. 6

No. 1、2 溝2出土遺物  
No. 9、10 土坑5出土遺物

No. 3～6 土坑2出土遺物

No. 7、8 土坑3出土遺物

図版8 第2次調査区出土遺物



No.1～8 土坑7出土遺物

No.9 土坑6出土遺物（壁土）

No. 5

図版9 第1次調査区出土軒丸瓦(1)



No. 1



No. 2



No. 3



No. 4

No. 1 軒丸瓦I類 No. 2~4 軒丸瓦II類

図版 10 第1次調査区出土軒丸瓦(2)・丸瓦(1)



No. 5



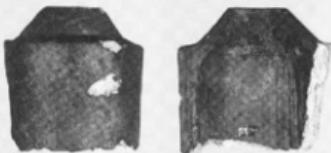
No. 6



No. 7



No. 8



No. 9

No. 5、6 軒丸瓦II類

No. 7、8 軒丸瓦III類

No. 9 丸瓦V類

図版 11  
第1次調査区出土丸瓦(2)



No.10 丸瓦I類



No.11 丸瓦II類



No.11



No.12 丸瓦III類

No.12

第1次調査区出土丸瓦(3)

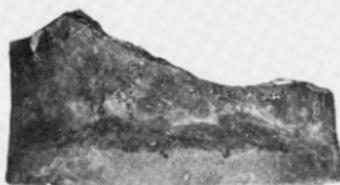


No. 13

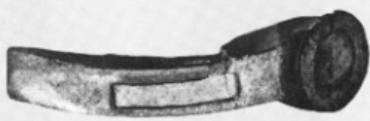
No. 14

No. 15

No.13、14 丸瓦III類 No.15 丸瓦IV類



No. 18



No. 19



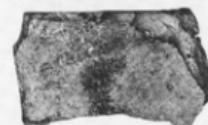
No. 20



No. 21



No. 22



No. 23

No. 16~18 軒平瓦 I類

No. 19~21 軒棧瓦

No. 22 軒平瓦 II類

No. 23 軒平瓦 III類

図版 14 第1次調査区出土軒平瓦(2)



No. 24



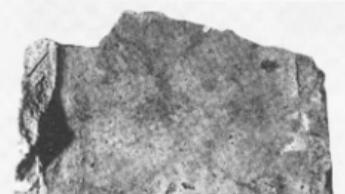
No. 25



No. 26



No. 27



No. 28



No. 29



No. 30

No.24~30 軒平瓦III類

図版15  
第1次調査区出土軒平瓦(3)・文字瓦



No. 31



No. 32



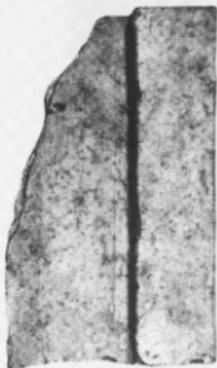
No. 33



No. 34

No.31、32 軒平瓦Ⅲ類 No.33 刻書瓦 No.34 刻印瓦

図版 16 第1次調査区出土壠桟瓦・平瓦(1)



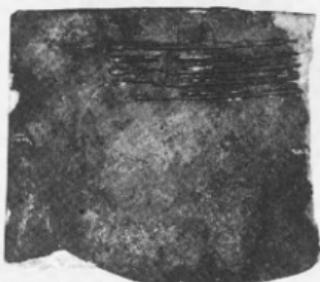
No. 35



No. 36



No. 37



No. 37

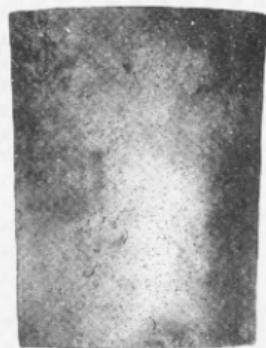


No. 38

No.35 壠桟瓦

No.36 平瓦 I 類

No.37、38 平瓦III類



No. 39



No. 40



No. 41



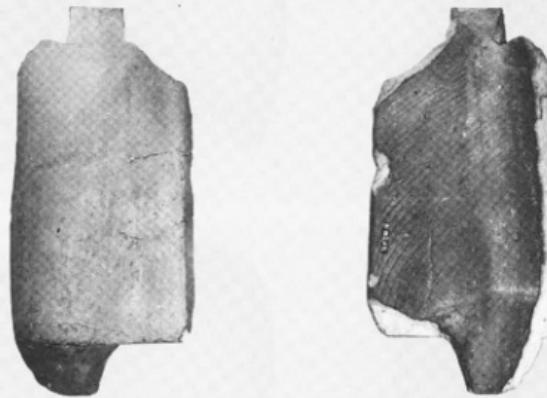
No. 42

No.39～41 平瓦II類 No.42 鳥衾瓦I類

第1次調査区出土鳥衾瓦(2)・雁振瓦



No.43



No.44

No.43 鳥衾瓦II類

No.44 雁振瓦

図版 19  
第1次調査区出土面戸瓦



No.45



No.46



No.47



No.48

No.45~48 面戸瓦

圖版20 第1次調査区出土棟込瓦・鬼瓦



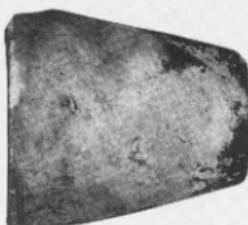
No. 49



No. 50



No. 51



No. 52



No. 53



角部



裏面



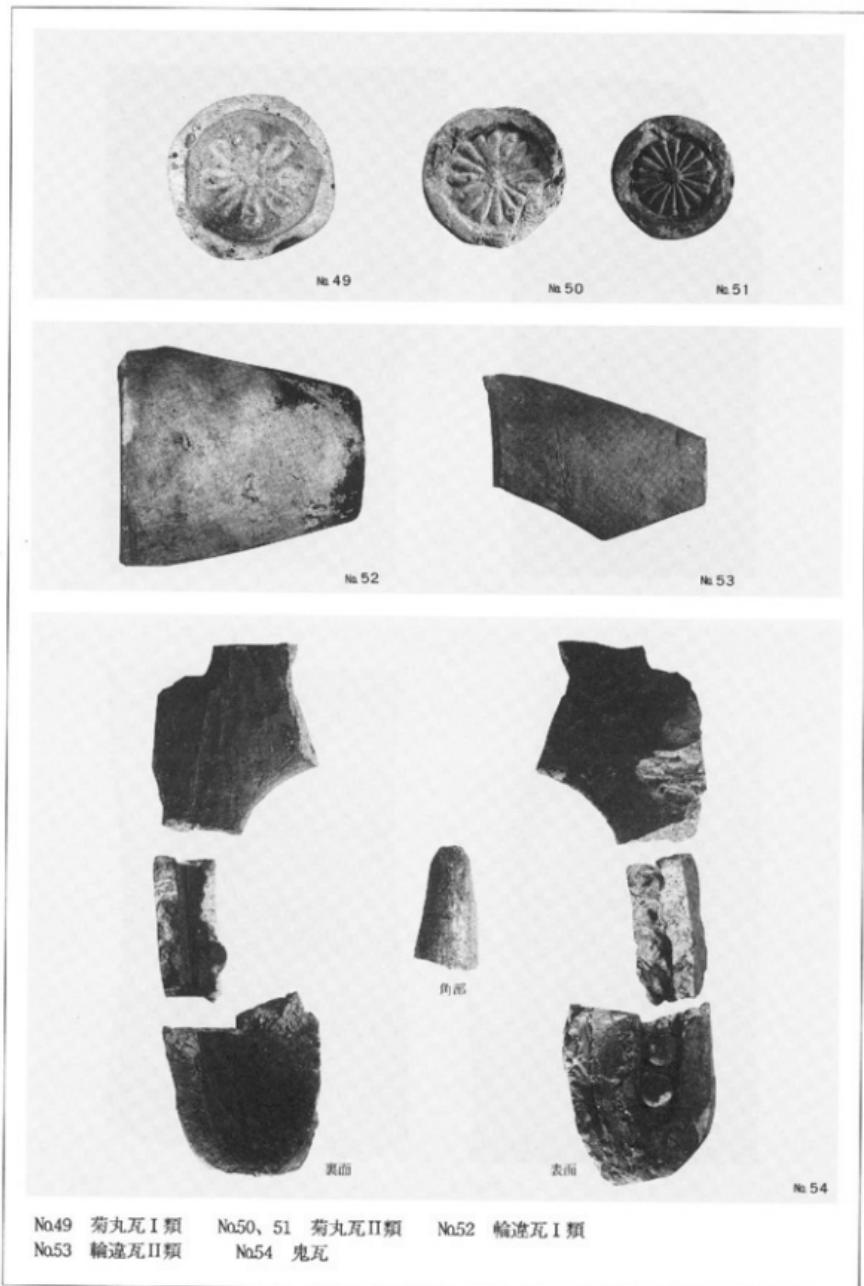
表面



No. 54

No.49 菊丸瓦 I 類  
No.53 輪違瓦 II 類

No.50、51 菊丸瓦 II 類  
No.54 鬼瓦





No. 55



No. 56



No. 57



No. 58

No.55 丸瓦 I類凸面狭端部  
No.57 丸瓦 II類凹面狭端部

No.56 丸瓦 I類凹面広端部  
No.58 丸瓦 II類凹面広端部

図版22 第1次調査区出土丸瓦細部



No. 59



No. 60



No. 61



No. 62

No.59 丸瓦III類No.14凹面狭端部  
No.61 丸瓦III類No.12凹面吊紐痕

No.60 丸瓦III類No.14凹面広端部  
No.62 丸瓦III類No.13凹面吊紐痕

図版23  
第1次調査区出土丸瓦・雁振瓦・平瓦細部



No. 63



No. 64



No. 65



No. 66

No.63 丸瓦IV類凹面 No.64 雁振瓦凹面狹端部  
No.65 平瓦I類凹面狹端部 No.66 軒平瓦III類No.32凹面布目

---

交野市埋蔵文化財調査報告 1992-II

## 新宮山遺跡

—交野市星田所在—

発行日 1993. 3

編集・発行 交野市教育委員会

印刷 例 ヨウセイ

---

